

大江町埋蔵文化財調査報告書 第5集

K-694

山形県西村山郡大江町

左沢楯山城遺跡調査報告書

2002

大江町教育委員会

大江町埋蔵文化財調査報告書 第5集

山形県西村山郡大江町

左沢楯山城遺跡調査報告書

2002

大江町教育委員会

序

(森を素通りするな)、私たちは、時としてあるいは何時も、森を素通りしています。しかし、変哲のない森の(何か)を看破したわが町の先哲諸氏は、左沢楯山城に、(何か)を発見しただけではなく、大江町民の出自確認に近づく普遍的意義を認識なさいました。先達の要の所以であります。爾来、昨年の八幡座発掘まで、10年間、歴史のロマンの懐で調査を継続できましたのは、文化庁のご理解・ご支援はもとより、関係各位のご援助の賜物であることと、併せて町民各位の歴史文化に対するご関心ゆえと考えますと、大江町の明るい未来が想念でき、皆様方に衷心より感謝と敬意の念を表すものであります。お蔭様をもちまして、平成13年度の調査報告書が完成した次第であります。

調査では、八幡座から左沢楯山城の山頂にふさわしい櫓跡を確認し、寺屋敷については全体像がイメージできるまでになりました。

人間に許された生なる時間は、人類の軌跡を光年とすれば、実に瞬間であります。だからこそ、砂漠の中の漆黒の夜の孤独な旅行者を、人間は演ずる訳にはいかないのであります。正しく、歴史に学んでこそ、恒久の幸福への展望が切り開かれるのであります。今後の地道な調査を経て、明らかにされうる左沢楯山城の歴史的事実は、必ずや、大江町民の輝かしい将来に寄与する一大ロマンを与えてくれると思われるのであります。とりわけ、(城)と(庶民=民衆)の相関と、(生かし一生かされ一生きてゆく)という(人)の哲理を語る一大ロマンとが、(掘り起こされる)期待があるのであります。

今後とも、左沢楯山城の調査に係る事業に、絶大なるご指導とご厚誼を賜りますように切にお願い申し上げます。

大江町教育委員会

教育長 渡邊兵吾



八幡座 2 区 槽 2 跡

例 言

1. 調査名 左沢楯山城遺跡発掘調査
2. 調査期間 左沢楯山城遺跡C地区八幡座周辺及び寺屋敷 2001年8月30日～10月3日
3. 調査面積 八幡座 650m²
寺屋敷 150m²

4. 調査体制

- ・調査主体 山形県大江町教育委員会
- ・発掘調査指導 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館長 川崎 利夫
- ・執行体制 左沢楯山城遺跡関連調査委員会

顧問	入間田 宣夫	東北大学東北アジア研究センター教授
委員長	伊藤 清郎	山形大学教育学部助教授
副委員長	高山 法彦	大江町文化財保護委員会委員長
委員	鈴木 勲	河北町町史編さん専門員
委員	北畠 教爾	河北町文化財保護審議会委員
委員	金山 耕三	山形県立博物館
委員	誉田 慶信	岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科教授
委員	大場 雅之	山形県企業振興公社
委員	松田 進	大江町文化財保護委員会副委員長
委員	犬飼 安太郎	大江町文化財保護委員会委員
委員	柏倉 昇	大江町文化財保護委員会委員
委員	片桐 隆	大江町文化財保護委員会委員

・事務局

山形県大江町教育委員会社会教育課文化係
 課長／木村 誠
 係長／村上 弘子
 主事／日下部 美紀
 町史編纂専門員／村上 宗紀

5. 縄張図作成 大場 雅之
6. 遺構写真撮影 村上 宗紀
7. 実測及びトレース 日下部 美紀
8. 八幡座周辺地形図 株式会社アドテック
9. 本書の執筆 平成13年度調査経緯／日下部 美紀
第1・2章 川崎 利夫
第3章 大場 雅之
第4章 伊藤 清郎

10. 現地調査における参加者は下記のとおりである。

大江町シルバー人材センター 安全就業指導員／太田 進
 作業員(シルバー人材センター) 林 善三郎・阿部 廣志・伊藤 忠雄
 (山形大学) 亀井 一寿・大場 恵一・村上 康広・羽角 良幸
 (東北芸術工科大学) 大木千賀子

11. 本調査は、平成10年度から国宝重要文化財等保存整備として文化庁より補助を受けての補助事業である。また、山形県教育庁文化財課からの助言を得ている。
12. 調査における図面・写真・遺物はすべて大江町教育委員会で保管している。

本文目次

平成13年度調査経緯	1
第1章 八幡座山頂部分の発掘調査	3
第1節 遺跡の立地と環境	3
第2節 調査方法と調査経緯	6
第3節 出土した遺構	8
(1) 2区	8
(2) 1区	12
(3) 3区	14
第4節 出土遺物	17
第5節 山頂八幡座の性格と発掘成果	20
第2章 寺屋敷の発掘調査	23
第1節 調査方法と調査経緯	23
第2節 今次の発掘調査	24
第3節 出土遺物	26
第4節 寺屋敷の全体像	28
第3章 縄張図調査	32
第1節 C地区(北外郭 通称見張台)	32
第2節 B2地区	32
第4章 成果と課題	36
第1節 今年度調査の成果	36
(1) 発掘・試掘調査の成果	36
(2) 縄張図調査の成果	36
第2節 次年度以降調査の課題	37
(1) 発掘・試掘調査の課題	37
(2) 縄張図調査の課題	37

図版目次

第1図	大江町主要部と遺跡位置図	3
第2図	左沢楯山城遺跡調査概要図	4
第3図	楯山城山頂部(八幡座)地形図及び配置図	7
第4図	楯山城山頂部2区遺構図	10
第5図	楯山城山頂部1区遺構図	13
第6図	楯山城山頂部3区遺構図	15
第7図	楯山城山頂部八幡座出土遺物実測図	18
第8図	楯山城山頂部遺構復元イメージ図	21
第9図	楯山城寺屋敷苑池遺構平面・断面図	25
第10図	寺屋敷出土遺物実測図	27
第11図	楯山城寺屋敷遺構全体図	29
第12図	C地区(北外郭 通称 見張台)縄張図	33
第13図	参考概要図	34
第14図	B2地区縄張図	35

写真目次

写真1	八幡座嶽入式風景	1
写真2	八幡座2区トレンチ設定風景	2
写真3	左沢楯山城全景	5
写真4	八幡座遠景	5
写真5	楯山城から見た最上川	5
写真6	2区から見た1区	6
写真7	2区切岸部分	8
写真8	2区櫓2跡	9
写真9	2区櫓2はしご跡	9
写真10	①2区櫓2柱穴(P6)	11
	②2区櫓2柱穴(P4)	11
	③2区櫓2柱穴(P3)	11
写真11	①1区櫓1柱穴(P4)	12
	②1区櫓1柱穴(P6)	12
写真12	①3区建物跡柱穴(P11)	14
	②3区建物跡柱穴(P15)	14
	③3区建物跡柱穴(P7)	14
	④3区柵列跡柱穴(P17)	14
写真13	1区柵列跡	16
写真14	1区トレンチ	16
写真15	3区トレンチ	16
写真16	3区建物跡	16
写真17	硯出土状況	17
写真18	①硯	19
	②釘	19
	③砥石1	19
	④砥石2	19
	⑤陶器片1	19
	⑥陶器片2	19
	⑦陶器片3	19
	⑧陶器片4	19
写真19	1区門跡	20
写真20	寺屋敷苑池遺構	23
写真21	苑池遺構(石組列4・6)	24
写真22	①苑池遺構部分断面	26
	②苑池遺構石組列断面	26
写真23	①陶器片1	27
	②陶器片2	27
	③陶器片3	27
	④陶器片4	27
写真24	苑池遺構集水孔	28
写真25	寺屋敷全体	31
写真26	苑池遺構(石組列4)	31
写真27	苑池遺構発掘調査風景	31
写真28	現地説明会風景	37

平成13年度調査経緯

平成13年「左沢楯山城遺跡」の発掘調査は8月30日から10月3日まで（実働21日）の調査期間で実施した。「八幡座」周辺及び平成12年度に確認された「寺屋敷」の苑池遺構部分の拡張調査である。「八幡座」周辺については、左沢楯山城遺跡の山頂となる周辺にどのような防御施設があるのか、また、城全体の中でどのような位置付けになっているのかを確認すること、「寺屋敷」については、平成12年度調査で確認された苑池遺構の全体の規模を明らかにすることを目的としている。8月30日から現場の草刈りを経て9月19日まで（実働14日）「八幡座」周辺の調査を行ない現場を「寺屋敷」に移動し、9月20日から27日まで（実働4日）拡張調査を進めた。27日の現地説明会後に最終日まで埋め戻し作業を行ない平成13年度の発掘調査を終了した。

「八幡座」は、標高222mの左沢楯山城の最頂部であり、この場所はきわめて面積が狭いが、一段高くなっている。この地点からは麓の左沢や最上川を一望することができる。山頂部分を1区、そこから約2m下の北東にのびる細長い曲輪を2区、さらに1.5m～2m下の平坦地を3区とする（第3図参照）。現場の草刈り等の調査準備を経て、9月3日の鍬入式後に以下のような調査を行なった。

9月3日／鍬入式後、2区に20m×2mのトレンチを設定し、これに直行したトレンチを入れる。表土剥ぎから一部精査へと進めていったが、約10cm程度で岩盤に達する。

9月4日／出土した柱穴遺構により拡張調査をする。

9月5日／2区に設定したトレンチを全体的に精査をし、拡張調査で切岸を確認する。さらに、1区には10mと6mの直交させたトレンチを設定する。

9月6日／2区トレンチの精査及び、1区に設定したトレンチの表土剥ぎと精査を進めるが、ここも2区と同じように約10cm程度で岩盤に達する。

9月7日／1・2区トレンチの精査及び2区の実測に入る。

9月10日／2区トレンチの切岸方向に柵列らしい跡を確認したため拡張調査を実施する。午後より、雨のため調査を中止した。

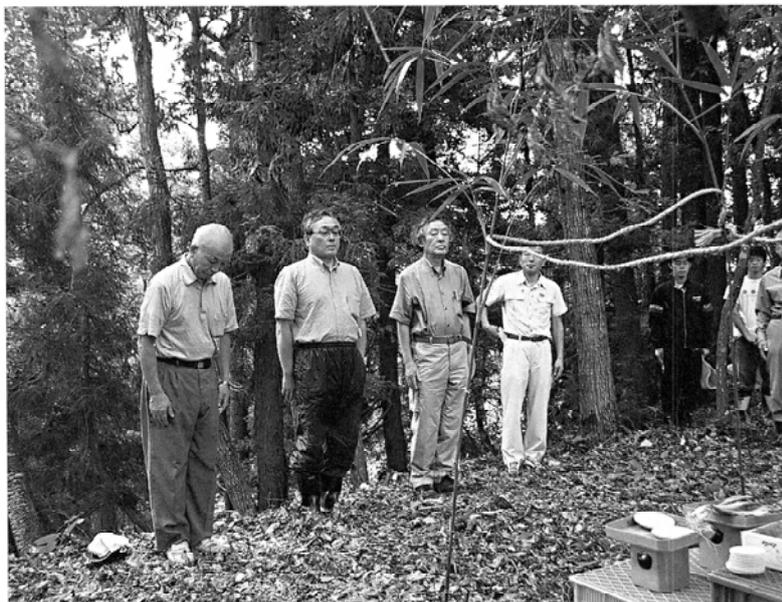


写真1 八幡座鍬入式風景



写真2 八幡座2区トレンチ設定風景

9月11日／雨のため中止。

9月12日／1・2トレンチの全体的な精査及び実測を進め、3区にトレンチを設定し、表土剥ぎを進める。

9月13～14日／3区トレンチの表土剥ぎ・精査及び実測をする。

9月17日／3区の全体的な精査と実測及び写真撮影に入る。

9月18日／3区トレンチの全体的な精査及び出土した遺構により拡張調査をしていく。

9月19日／3区トレンチの拡張調査により切岸を確認し、実測及び写真撮影を進める。発掘調査現場を寺屋敷に移動し、平成12年度の調査結果に基づき苑池遺構の外周や規模を確認するために、4m四方の2つのグリッドを設定する。また、八幡座周辺の地形図を作成するために業者と測量についての打合せを現場にて実施する。

9月20日／寺屋敷に設定したグリッドの表土剥ぎ及び精査を実施する。また、業者により八幡座周辺の地形図作成のための測量を実施する。

9月21日／雨のため中止。

9月25日／寺屋敷調査部分を全体的に精査をする。

9月26日／全体的な精査及び実測。平成12年度に確認した石組列に続く石組を確認し、苑池遺構のおおよその規模が見えてきたが、苑池遺構から出ている小ピット群から想定される建物を確認するまでには至っていない。

9月27日／「八幡座」周辺での調査についての現地説明会を実施する。

9月28日～10月3日／調査現場の埋戻し作業を実施する（10月1日は雨のため中止）。

縄張図調査については、C地区である「八幡座」の北側に張り出した外郭（通称見張台）及びB2地区の楯山公園から愛宕神社一帯に広がる丘陵全域の現地踏襲調査を実施している（第2図参照）。発掘調査とは時期を異にして、12月に数日にわたって調査している。詳しい調査の成果については、第3章に記す。

第1章 八幡座山頂部分の発掘調査

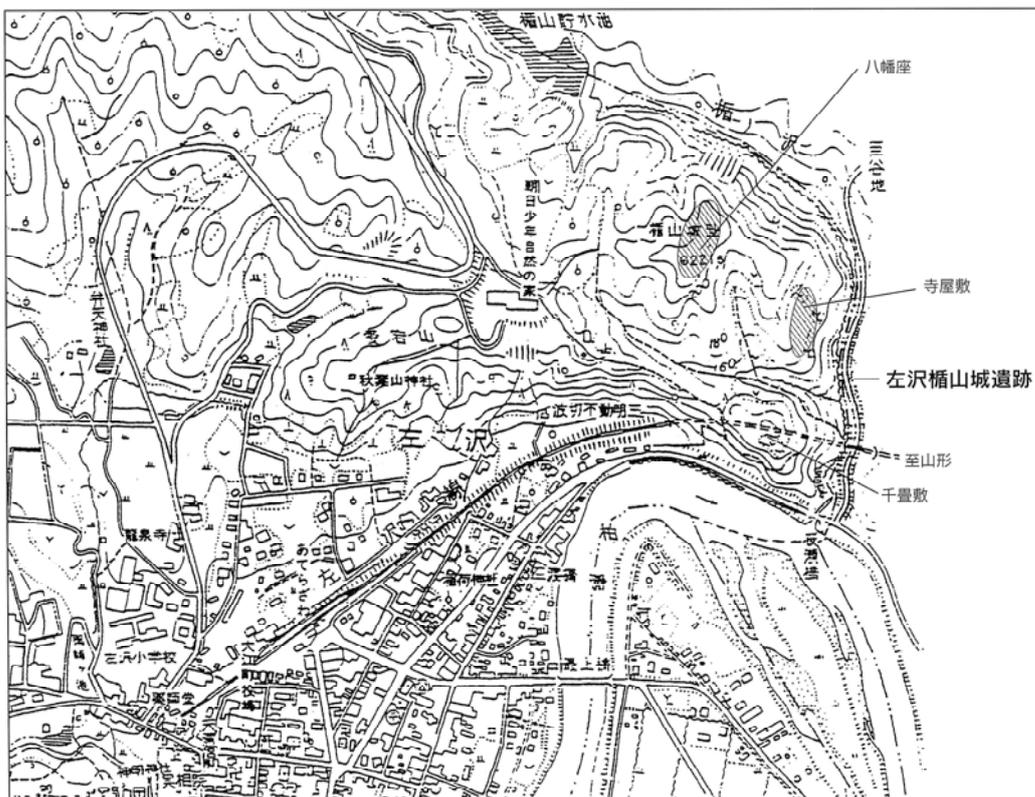
第1節 遺跡の立地と環境

左沢楯山城は、北流する最上川が村山盆地へ向かい大きく東へ屈曲する部分に位置する。近世河岸として栄えた左沢の町の北部に連なる標高200m前後の丘陵部にいくつかの曲輪を備えた山城である。最上川水面の標高は112mで、山麓部は130～135mであるから、比高は100m程である。曲輪の一部には楯山公園や朝日少年自然の家などの施設があり、その他は雑木林や畑地・果樹園などとなっている。

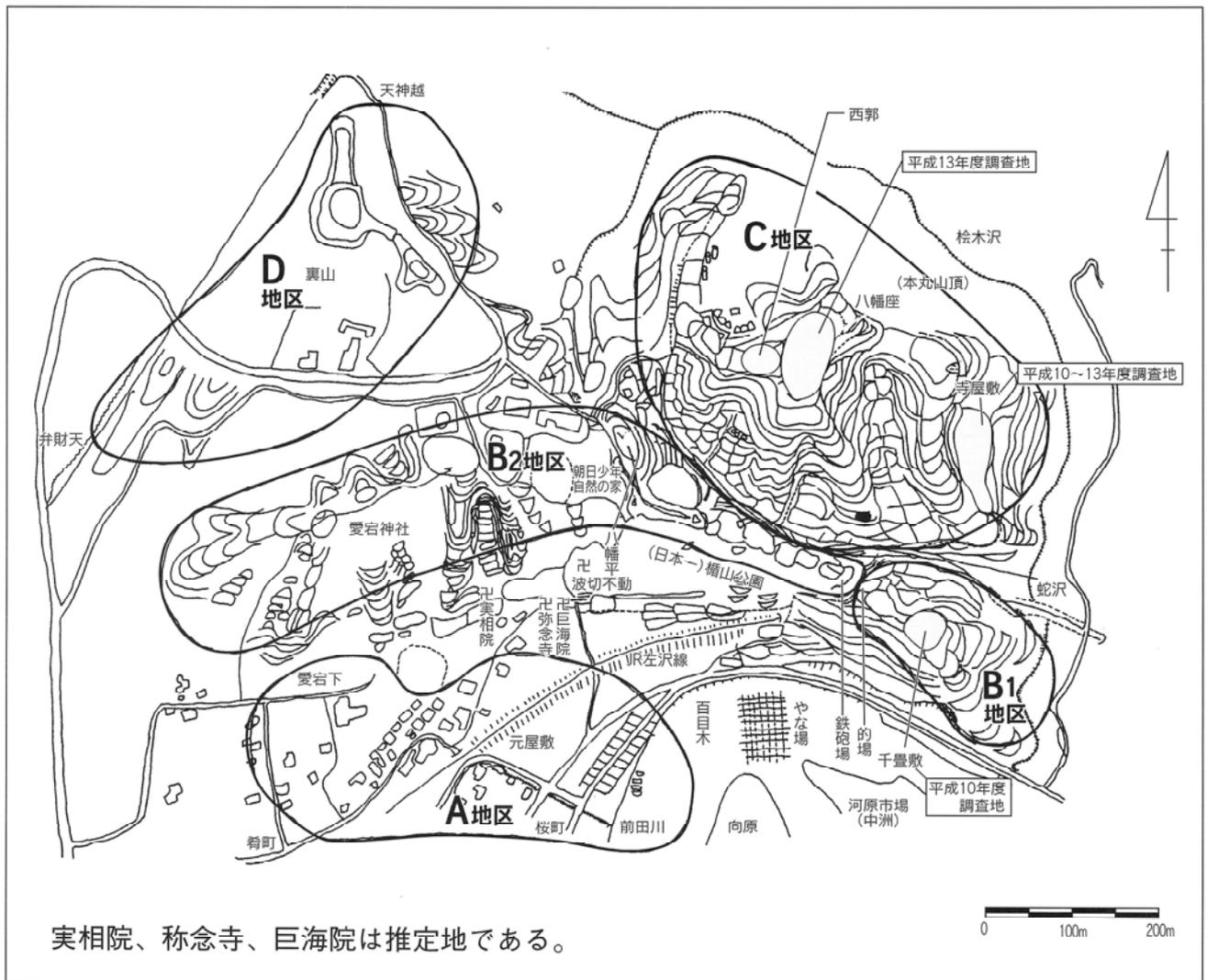
その東側は寒河江市平野山（標高274.5m）、富山（標高266m）、西側にも標高250m前後の山々が連なる。そして楯山と平野山の間には、平野山トンネルを通過して山形自動車道酒田線が通り、楯山西側は左沢から国道112号線（月山新道）に至る国道458号線が通っている。その間東西800m、南北500mが楯山城の範囲である。

楯山城は最上川舟運をおさえ、村山盆地にはいる箇所をおさえる重要な位置にあるが、寒河江庄地頭大江氏七代時茂が三男元時をこの地に配したのがその始まりと伝えられている。以後左沢氏を名乗り、最上川西部の西村山に勢力を伸張して栄えるが、戦国時代末期の天正12年（1584）山形最上義光に滅ぼされて最上氏の傘下に入った。その後慶長5年（1600）の出羽合戦にも重要な位置にあったが、元和の頃廢城となっている。

これまで4年次にわたり、楯山城内の西郭・千疊敷・寺屋敷などの発掘調査を実施してきた。発掘により戦国期山城の様相が鮮明になりつつあるが、遺構や遺物は概ね16世紀を中心としている。現況では16世紀から17世紀初頭の戦国期から近世初期の山城とするのが至当であろう。（「左沢楯山城遺跡調査報告書1～3集」1999～2001年 大江町教育委員会）



第1図 大江町主要部と遺跡位置図



第2図 左沢楯山城遺跡調査概要図

今年度は楯山城最頂部の八幡座を中心に発掘調査を実施し、あわせて寺屋敷（苑池遺構一部）の発掘調査も行った。

最頂部の八幡座といわれる場所は、国土地理院の地形図によれば標高222mで、三角点の石標も立っている。麓の左沢や最上川辺りからも周辺より一段高いこの地点を仰ぎ見ることができる。一般にはここが左沢楯山城の本丸と認識されてきたようである。

現状では山頂はきわめて狭く、南東部を頂点とする14m×8mで、周辺部にこれを取り巻く狭い曲輪がめぐり、東北のくびれたところに虎口があるが、これを含めても17.5m×12.5mにすぎない。下をめぐる曲輪を除くと56㎡ほどの三角形の平面である。最も高い場所で標高220.2mほどである（第3図参照）。そして北西部に尾根が伸びて少しずつ高さを減ずるが四段にわたる曲輪が連なり、1997年に最初に発掘した西郭に達する。

山頂部の高まりより約2mの落差をもって北東へのびる尾根は、長さ22.5m、幅7.5～11mの細長い曲輪を形成する。このあたりは217～218mの標高を示す。この曲輪から1.5～2mの落差を経て約30m北に向かうと今は雑木林に覆われているが、南北に20mあまり、東西に32m、面積約620㎡ほどの平坦地があり、これこそ山頂に伴う曲輪であろう。ここを左沢楯山城の主郭（本丸）と見れば山頂部は櫓台などの見張り場であったのではないだろうか。



写真3 左沢楯山城全景



写真4 八幡座遠景

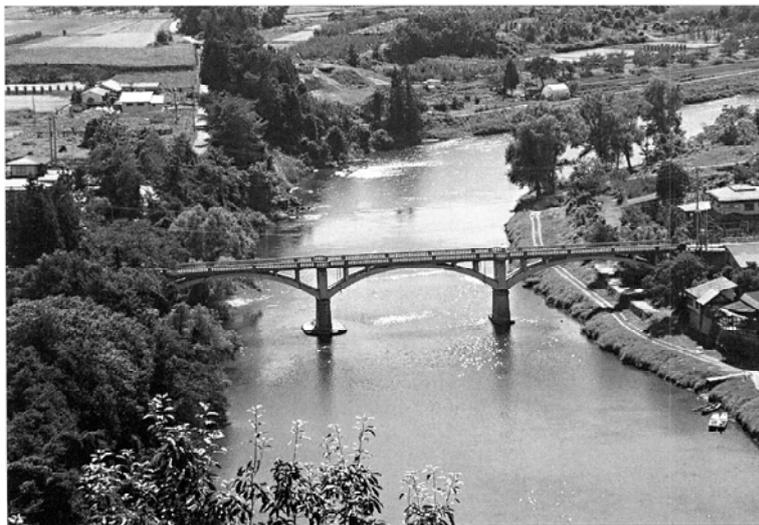


写真5 楯山城から見た最上川

第2節 調査方法と調査経緯

山頂部の三角平面の狭い場所を1区、その下の北東に伸びる細長い曲輪を2区、さらにその北に続く広い曲輪を3区と仮称しておこう。これは発掘調査時の順序とトレンチ名をもとにして発掘地点を示したものである。

発掘調査にあたっては2区から始め、細長い曲輪に20m×2mのトレンチを設定し、遺構の出土状況などを勘案しながら、柵列の有無を確かめるためにこれと直行するトレンチを入れ、漸時拡張精査を行った。

山頂部の1区は、10mと6mのトレンチを十字に交差させて設定した。幅は2m、特に虎口付近にもトレンチを設けて精査を行った。

1・2区の発掘が完了した段階で、3区にもトレンチを4本設定して遺構の存否を確かめたが、ここには2m方形のグリッドを設ける必要があるだろう。

地層状況は、概ね腐植土が20～30cm堆積し、その下部は褐色粘質土か凝灰岩質の岩盤で、柱穴などの検出は容易であった。

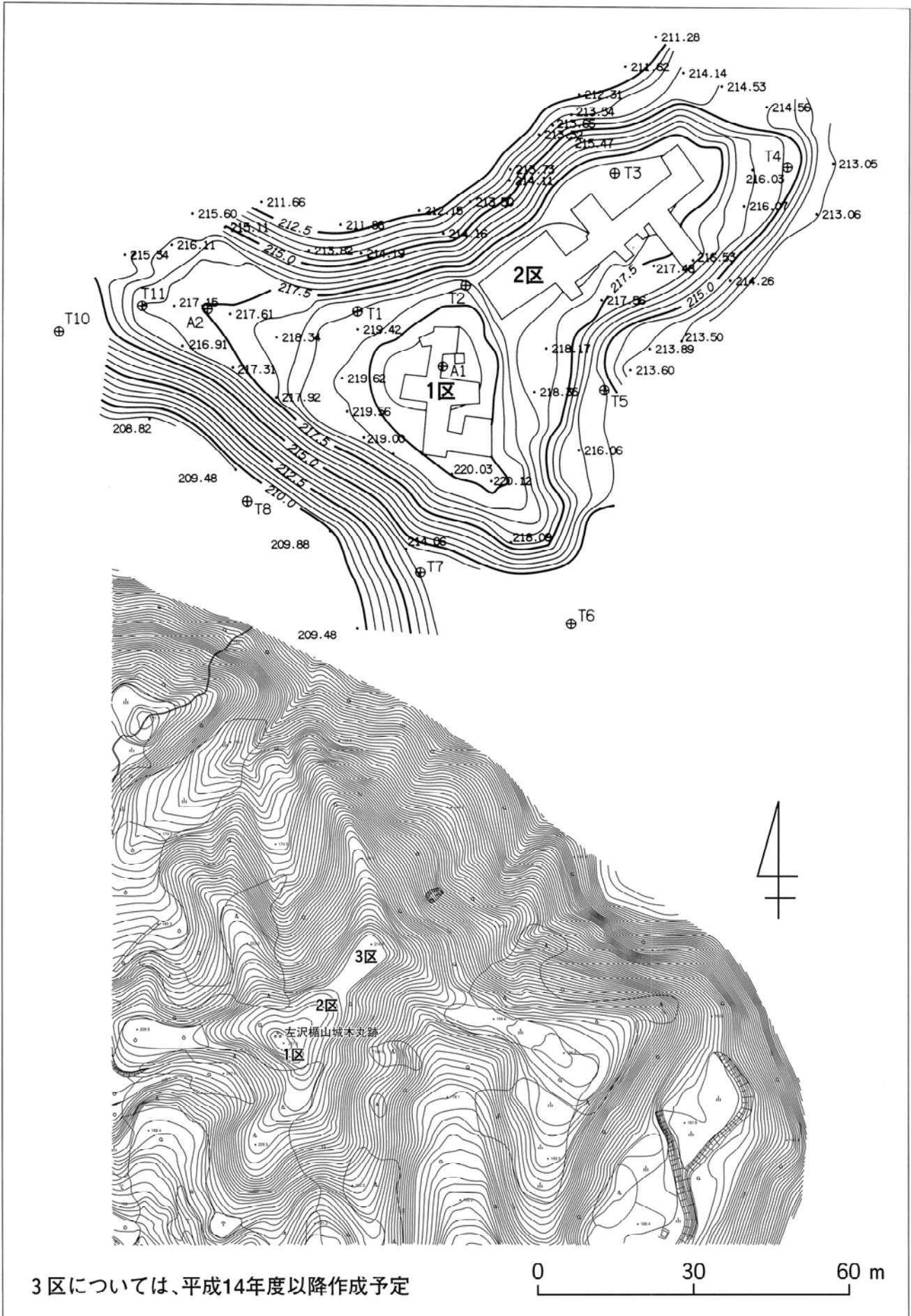
調査期間は寺屋敷の補足調査を含めて、8月30日より10月3日まで（実働21日）であったが、発掘最終段階の9月27日は午後から現地説明会が行われ、大江町立左沢小学校の児童をはじめ地元の愛好者・研究者などが多数参加した。

なお、山頂部1・2区については、その周辺も含め株式会社アドテックに依頼し、50cmのコンターによる詳細な地形図を作成した。



写真6 2区から見た1区

第3図 左沢楯山城山頂部(八幡座)地形図及び配置図



3区については、平成14年度以降作成予定

0 30 60 m

第3節 出土した遺構

発掘調査によって発見された遺構について、発掘順に記述する。

(1) 2区(第4図参照)

山頂部の1区より2mほどの落差をもって北東方面へ伸びる尾根を整形し、長さ22.5m、幅7～8mの細長い曲輪を形作っている。南東部はこれより1mの段差をもって狭い帯曲輪がめぐる。

この細長い曲輪の2区より約2mの落差をもって下がる崖の下端より2mの箇所から岩盤を掘りぬいた四角柱の柱穴P1が検出された。それは25×30cmの方形で、深さ30cmであった。それと対応する柱穴P2がその東側にあり、心々での間隔は1.8mである。さらにその北側3.4mの地点から掘り方は円形であるが、内部から方形となる柱穴P4があらわれ、その東2mよりP6の角柱穴が掘り出された。P4とP6の中間にP5の浅くて小さい角柱穴がある。これらを結ぶとやや歪みがあるものの1.8m×2mほどの長方形となり、これら角柱穴を結ぶ対角線が交わるあたりにP3の小さな角柱穴がある。またP4の北側90cmほどにP9とP8などの柱穴が40cmの間隔で並ぶ。これらの角柱穴群は、櫓台跡と考えられ、P9・P8はこれに登る梯子などの柱穴であったと思われる。

さらにこの長い曲輪の縁辺部からP11・P15・P16・P17・P22・P21・P20・P19、やや隔たりがあつてP13・P14などの角材を埋め込んだ柱穴列が発見された。これらの柱穴列は明らかに2区の細長い曲輪のまわりにめぐらされた柵列の痕跡と思われる。これらは、2.2～2.4mほどの間隔でめぐらさる。ほぼ7～8尺の間隔で角柱があり、図面ではこれらの柱穴がない空間もあるが、これらは未発掘の箇所である。そしてこの曲輪への入り口は北端部で、ここに並列的に三つの柱穴が集中する。この三つの柱穴が門柱跡と思われる。なお、櫓台と推定した箇所よりも北に隣接して小規模な小屋のような施設もあつた可能性があり、柱穴(P12など)も認められる。柵列によって囲まれた櫓台がこの曲輪の主要な施設で、南東側は低い切岸を挟んで帯曲輪がめぐり、北西側は急な崖をなし、北側の虎口部分は、尾根道を経て3区の曲輪に通ずる。



写真7 2区切岸部分



写真8 2区櫓2跡



写真9 2区櫓2はしご跡

第4図 楯山城山頂部2区遺構図

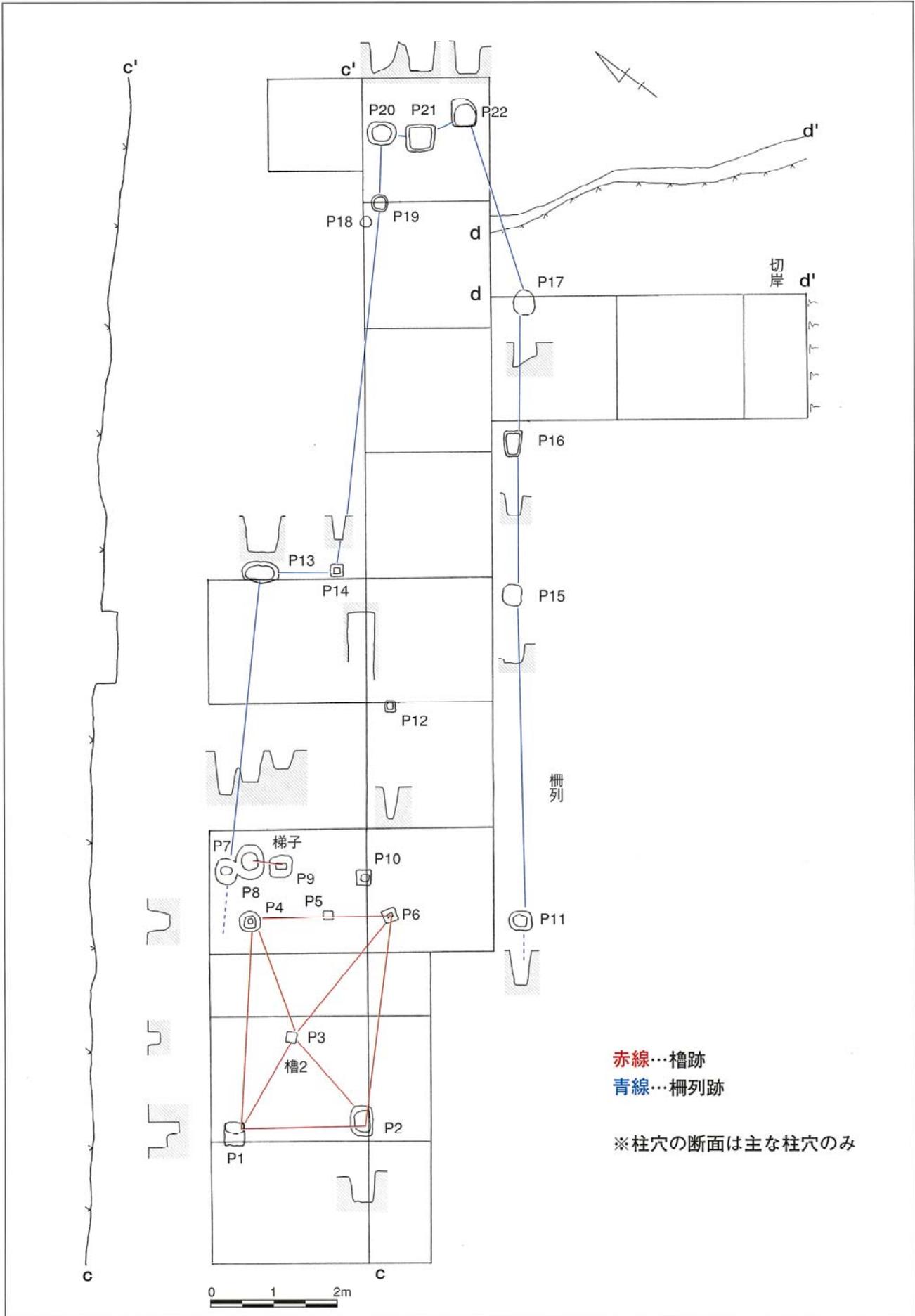




写真10 ①2区櫓2柱穴(P6)



写真10 ②2区櫓2柱穴(P4)

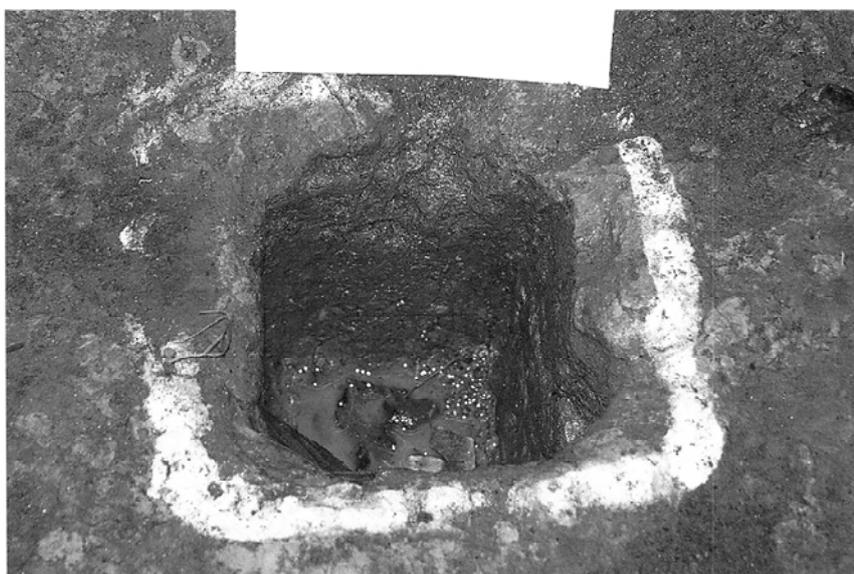


写真10 ③2区櫓2柱穴(P3)

(2) 1区 (第5図参照)

三角点のある山頂部の1区は「八幡座」と呼ばれているが、14×8mの平面三角形の周囲より一段高まる高所となっている。当初からここには櫓台が存在するものと推定していたが、予想していたとおりの結果であった。

最も高い部分にP6・P8・P4などの円柱を埋め込んだ柱穴が方形に並ぶ。南東隅のみ柱穴がないのは不自然であるが、ここに祠があったらしく、それを据える際などに失われたのかもしれない。柱穴の大きさは40～50cm、柱穴の底部は円形に穿たれているから、25cm程度の円い柱を用いたものであろう。いずれも岩盤を穿って40～50cmほどの深さである。この施設の大きさは東西2.8m、南北2.2m、9尺×7尺で、やや東西に長い方形である。柱の太さからしても高い櫓台ではなく、せいぜい5m前後のものと推定される。

P18とP16は、角材を用いた山頂1区の曲輪への虎口と考えられ、通路はほぼ1mで屈曲しながら櫓台に至る。それに続いて柵列と思われる角柱穴或は円柱穴が地形にそって南側から西側へとめぐっている。1.5～1.8mで5尺から6尺の等間隔に柱が立っていたのであろう。門柱にあたる柱穴は岩盤をくり抜いているが、その他の柵列柱穴も岩盤を穿ったものが多い。柱穴の大きさは、櫓台の柱穴より一回り小さく、径25cmほどである。2区が角材を用いているのに対して1区は円い柱材を用いているが、1区のもは2区より一回り大きい。新旧から言えば1区が2区より若干早い時期に設けられたものであろう。



写真11 ①1区櫓1柱穴(P4)



写真11 ②1区櫓1柱穴(P6)

第5図 楯山城山頂部1区遺構図

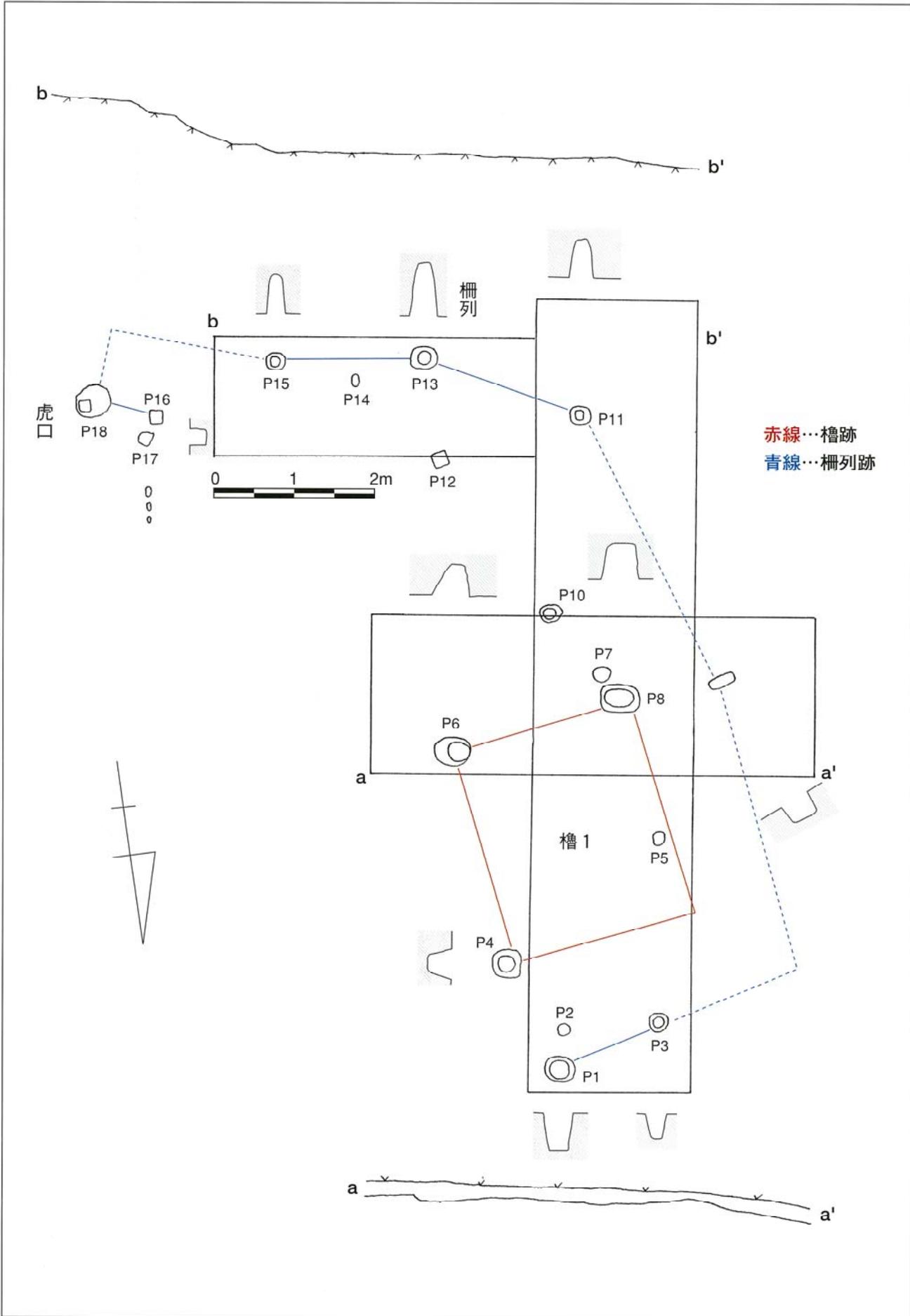




写真12 ① 3区建物跡柱穴 (P11)

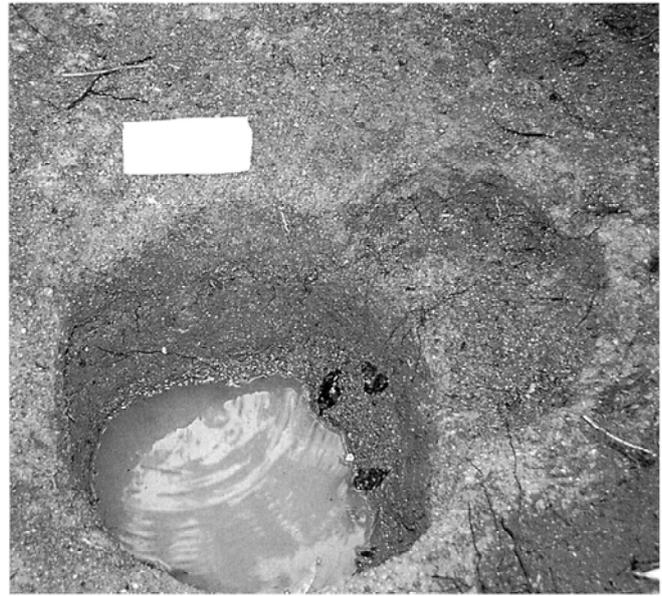


写真12 ② 3区建物跡柱穴 (P15)



写真12 ③ 3区建物跡柱穴 (P7)



写真12 ④ 3区柵列跡柱穴 (P17)

(3) 3区 (第6図参照)

山頂部の1区より一段下がった2区を経て尾根道をたどったところにやや広い平坦地である3区の曲輪が展開する。2区からの距離は約30mである。この度は掘立柱などの施設の有無を確認する目的で2m幅による4つのトレンチを設定した。ここでの発掘面積は約90m²であった。

切岸にのぞむ曲輪縁辺部にはP17~P19のような比較的小規模の柱穴群が確認されたが、これらは曲輪をめぐる柵列と考えられる。まだ広い範囲にわたる発掘は行われていないが、曲輪西側において桁行4m、梁間2m余りの2間と1間の角柱による建物跡が検出された。またこれと隣接する東側からP1~P4の方形の掘り方をもつ柱穴群、さらにその南側のP10~P5の同じく方形の掘り方による4個の柱穴群が直線状に並ぶ遺構が確認されている。柱穴の間隔は1.8mから2mほどで6~7尺である。これらは掘立柱建物の東西棟の桁を示すものであろう。従って3間×αの建物がやや方向がずれるが、2棟並んで建っていたと推定される。この620m²、190坪ほどの曲輪は、周囲を柵がめぐり、少なくとも3棟以上の建物があったものと推定される。この3区曲輪の全容については来年度の調査によって明らかにしていきたい。

第6図 楯山城山頂部3区遺構図

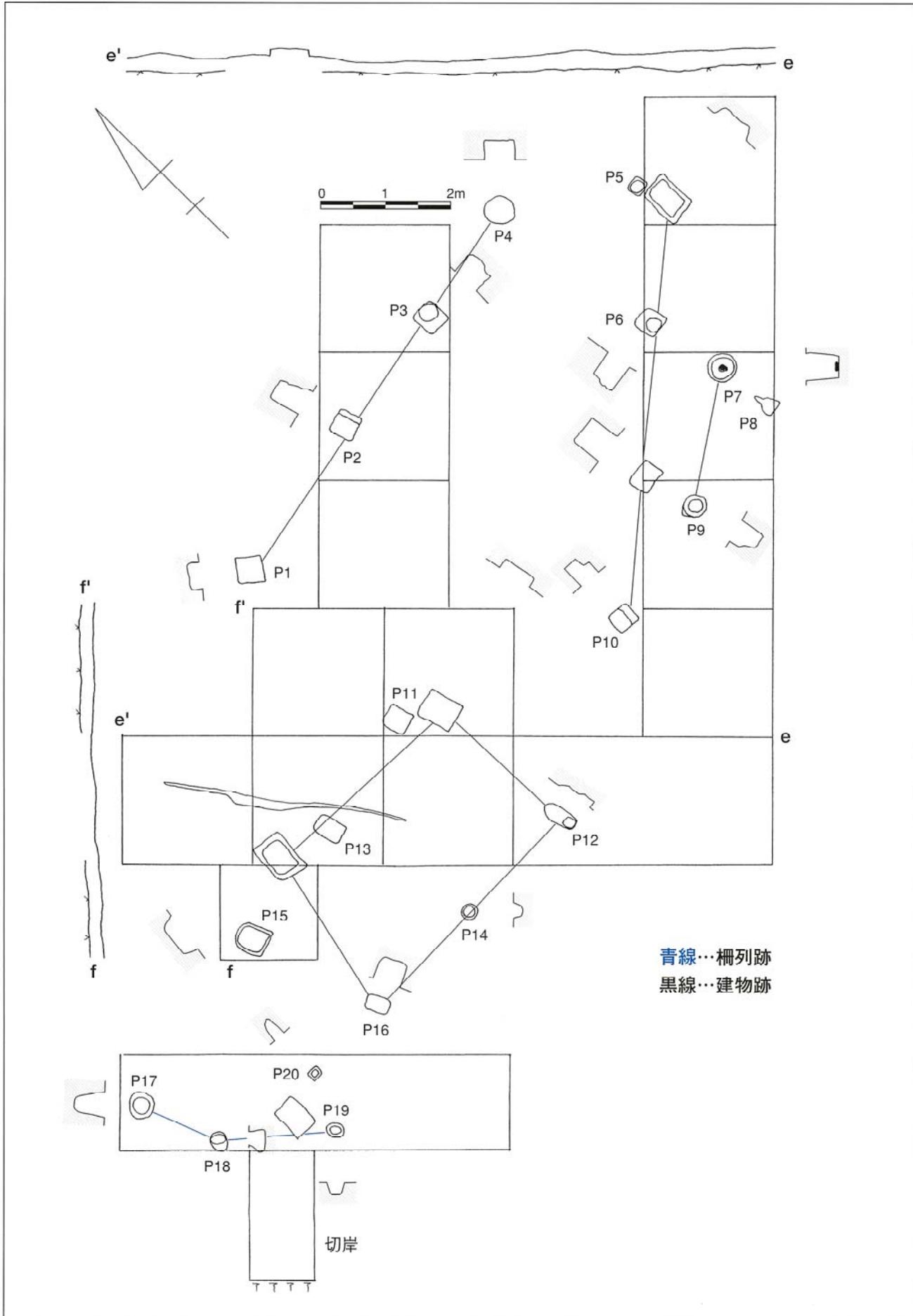




写真13 1区柵列跡

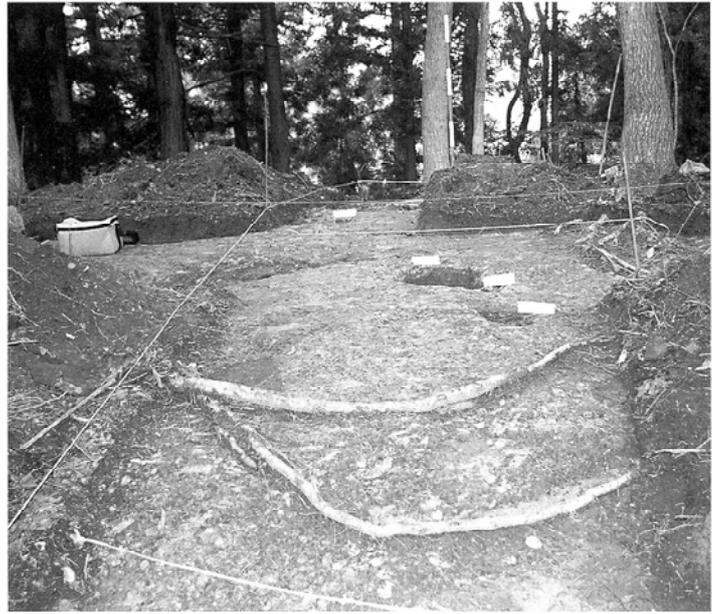


写真14 1区トレンチ



写真15 3区トレンチ



写真16 3区建物跡

第4節 出土遺物（第7図参照）

楯山城山頂部の八幡座1・2区地点からは、この度の調査で硯1、砥石2、磁器破片10、陶器破片3、鉄釘1、石器破片1などが出土している。主として覆土や遺構検出面、柱穴の中などから発見された。出土遺物はこれまでと同様に少量である。

硯は長方形の石硯で、下部が折損しているが幅5.7cm、厚さ1.6cmで、墨を磨る墨堂（陸）の中央が縦長にくぼみ硯池上部まで幅1.2cm、深さ5mmほどの擦過痕が認められる。従って硯を砥石に転用したものであることがわかる。2個の砥石は、いずれも折れて全形は不明であるが、断面は方形を呈し研磨によって平滑になった磨り面を四面に残している。山城や館跡から砥石が出土する例は多く、西川町睦合館の主郭から21点の砥石が出土している。武器等を研磨するために用いられたのであろう。

鉄釘は錆化が著しいが、長さ11.3cm、一辺3mmほどの角釘で、頭部は長方形を呈する。櫓などの建築材の組み立てに使用されたものである。

磁器片も陶器片もすべて3cm以下の小破片のみで、器形などは不明なものが多く、磁器では染付けが多いが、青磁のしのぎによって縦方向の文様をあらわした香炉と思われる小鉢や、表面灰釉で内面染付けの肥前系陶器の茶碗と思われる底部高台部分の小破片もある（第7図5，8）。その他黒色や褐色の素焼きによる土器片もある。

砥石や釘などは、この遺構の施設が機能していた年代に近いが、肥前系の染付磁器（伊万里焼等）がこの地域にも普及するのは大方17世紀中葉以降と考えられ、ここから出土した陶磁器片の大半も17世紀以降の江戸時代のものであろう。



写真17 硯出土状況

第7図 楯山城山頂部八幡座出土遺物実測図

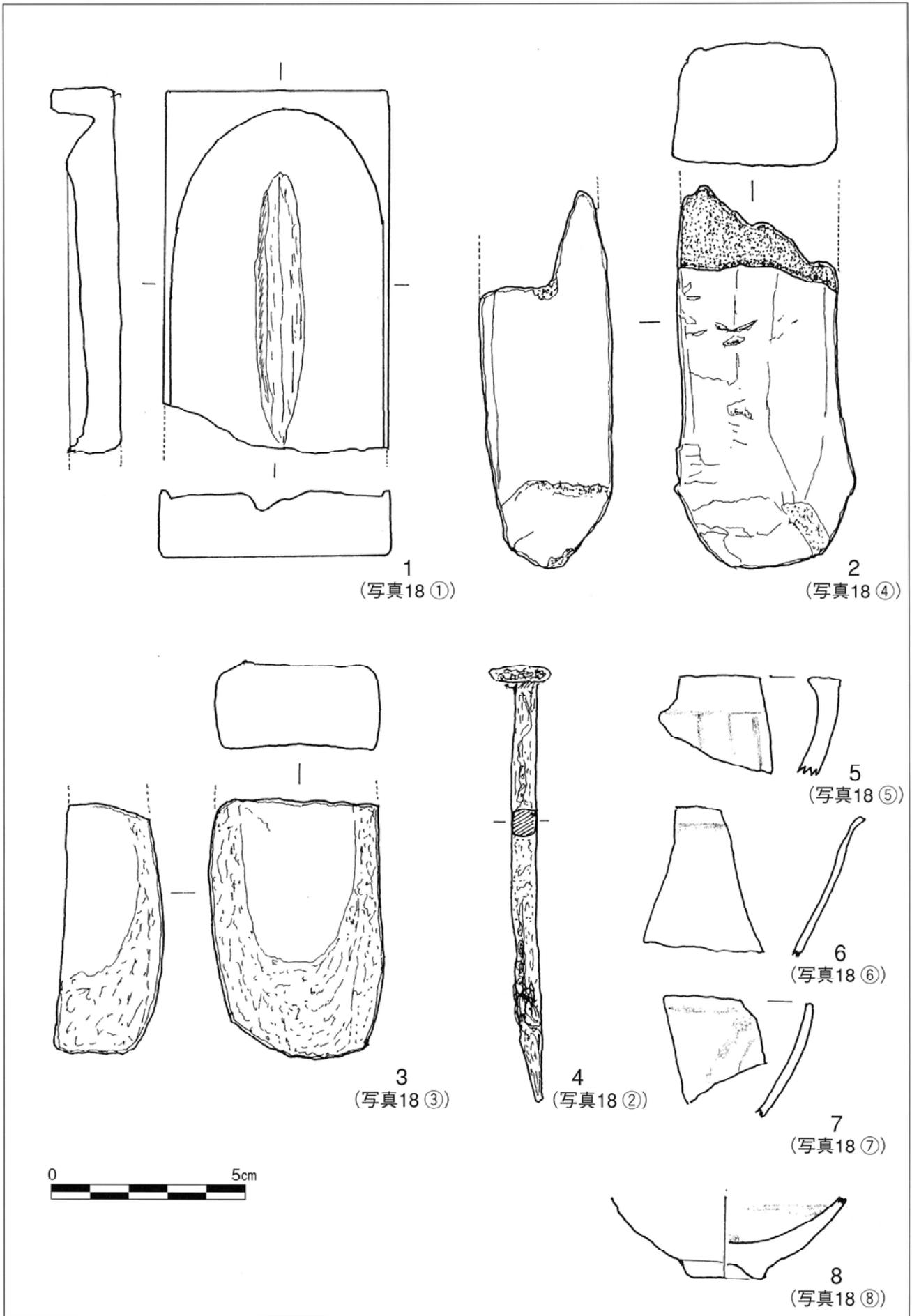


写真18八幡座出土遺物

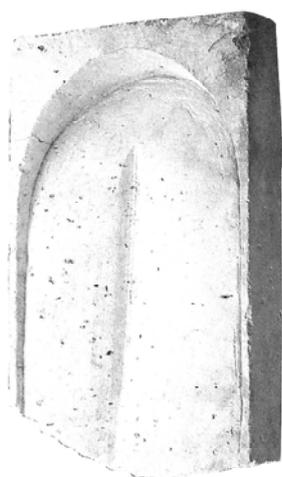


写真18 ①硯



写真18 ②釘



写真18 ③砥石 1



写真18 ④砥石 2



写真18 ⑤陶器片 1 左 ⑤陶器片 1 右



写真18 ⑥陶器片 2 左 ⑥陶器片 2 右



写真18 ⑦陶器片 3 左 ⑦陶器片 3 右



写真18 ⑧陶器片 4 左 ⑧陶器片 4 右

第5節 山頂八幡座の性格と発掘成果

山頂の標高222mの八幡座は56㎡ほどの狭い場所であるが、ここに削り出しによって二段の小さな壇を作り、最頂部に櫓台を設けていたことが判明した。それより2mほど下がった尾根を利用し、長さ22.5m、幅7～8mを見事な普請によって周囲を削り出し、一方に狭い帯曲輪を一段めぐらし櫓台を設けていた。これら二つの櫓台が並ぶ1・2区から、さらに尾根道を伝って数10m北側にはやや広い曲輪が展開する3区がある。おそらく櫓台に関連する曲輪で3棟の掘立柱建物跡が検出されている。

櫓は、前方を広く見渡す事ができ、敵が攻めてくる方向を監視する役割をもち、近世の天守に相当する。最頂部1区の櫓は最上川や南方一帯を見渡す役割になり、また楯山城の諸曲輪の動きを見通せる位置にある。また、一段下がった2区の櫓は北方の動きを見張り、楯山城南側を通る今の県道日和田・松川線を監視する事ができた。上山市の中山城や天童古城の主郭、米沢市館山の米沢城にも、やや高く土を盛り上げて構築した櫓台跡の遺構が残っている。また平田町砂越城跡には復元された櫓が立っている。

2つの櫓は、柱穴の規模から見てさほど高いものではなかった。自然の地形からしてさして高いものを必要としなかった。1区の櫓は円柱、2区の櫓は角柱を用いている。高さはせいぜい5～6m規模でなかったのか。

築城の手引書でもある『築城記』（『群書類従』第23輯）などによると、櫓台を「井楼」といって、いわゆる「蒸籠（せいろう）」のように井桁状に横材を組みながら高く上げるという記述がある。そして一番上部には楯を並べたり屋根を取り付けたりしている。おそらくこれと同様に4本の柱を立て、下から一定の間隔で横木を組み立て、さらに補強するために交差する材をその間に取り付けるようなものであったのではないだろうか。櫓の上部構造は不明と言う他なく、推測の域を出ない。2区の櫓は内部に梯子などを取り付けたと思われる内ころびの柱穴が約1m弱の間隔で発見された。

それら二基の櫓の施設を囲んで、柵列が曲輪の縁辺にめぐっている。1区の曲輪は虎口の跡らしい門柱跡が北東部に設けられ、屈曲して櫓まで入る。2区の曲輪への虎口は北端部にあったと思われる。

さらに1・2区の狭い曲輪から尾根道を30m下がったところにやや広い3区の曲輪があり、ここには3棟以上の建物があった。楯山城における1・2・3区の曲輪群の周辺は、また急崖をなすか帯曲輪や曲輪が段状にめぐり、堅固な様相を呈する。この辺りを本丸と称してきたが、まさに楯山城主郭にあたるどころがこれら頂部の曲輪群と考える事ができるだろう。



写真19 1区門跡



第8図 楯山城山頂部遺構復元イメージ図

第2章 寺屋敷の発掘調査

第1節 調査方法と調査経緯

寺屋敷は、左沢楯山城山頂部の八幡座より200m東に位置し、標高167mで、最も奥に位置する。楯山城の中では比較的広い平場で、465㎡ほどの面積である。東側に開け、桧木沢を隔てて県道日和田・松川線が通り、柴橋地区の平野山を眼前に望むことができる。

寺屋敷の発掘調査は、平成10年度の試掘に始まり、今年度で第4次を数える。この平坦地に4m方形のグリッドを設け、全域にメッシュをかけ、試掘は幅1.5～2mのトレンチを南北と東西に入れて遺構の存在を確認し、平成11年（1999）から本調査に入った。この第2次調査より、この台地北半部において五間四方の掘立柱による草堂的な仏堂が検出された。これこそ南北朝期に柴橋落衣にあった旧巨海院がこの地に移された時期のものと見られ、それは天文11年（1542）の頃で、ここに寺院があったのは16世紀前半の短い時期と思われる、当初は真言宗であった。寺屋敷の地名も、楯山城鬼門にあたるこの地に巨海院があったことに由来する。そして領主の左沢氏の城下整備に伴い16世紀後半に現在地の楯山城西南の街道沿いに移建された。これは「巨海院由緒」などの記載と一致する。その後、この建物の一部は6間×3間の倉庫風の施設として利用された。（第11図参照）

平成12年（2000）の第3次調査は、仏堂と思われるSB1より12m南西部で発見された苑池遺構とその周辺部の調査が行われた。30～50cmの割石や川原石を配して縁石とし、隅丸長方形のプランで、底部は平坦で旧地表より50～60cmの深さをもち、石組列が池の内部に向かって張り出し、池内部につくばい状の平石が配され、さらに東側切岸にむかって真直ぐ伸びる排水溝もある。（第9図参照）

ここにあった16世紀中葉前後に機能していた寺院に伴う苑池遺構と推定された。第4次にあたる今次の調査は、苑池の外周や規模を明らかにする目的で短期間の発掘調査が行われた。主としてこの遺構の南辺や西辺の状況を把握する事が主眼であり、発掘面積は2グリッドで32㎡である。なお、この苑池の東側にも掘立柱による円い柱穴群があるが、その規模や性格を明らかにするまでには至っていない。寺屋敷の調査状況については、「左沢楯山城遺跡調査報告書」（2000・2001年度）に詳細に記述してある。



写真20 寺屋敷苑池遺構

第2節 今次の発掘調査（第9図参照）

苑池遺構の南辺や西辺の状況がまだ把握されていないので、池の全容を解明する事を目的に発掘調査を実施した。その結果、西縁の状況はまだ必ずしも明らかではないが、南縁が検出され、池の規模やそれをめぐる遺構配置が把握された。

昨年度まで石組列4の一部が検出され、これが南縁と思われていたが、さらにその外側にもう1列の石組（石組列6）があり、これが池の南縁と考えられる。南縁の石組列も東西に直線状に20～40cm程度の大きさの凝灰岩割石が並んでいる。また、昨年一部検出された石組列4はさらに西側へむかって伸びて、全長4.5mにわたり東西に直線状に配列されている。西縁部はほとんど石の配列がなく、地表からそのまま池を掘り込んでいる。池の深さは旧地表より50～60cm、現地表から1～1.1mの深さで、底面は平らになっており、黒色有機土がうすく堆積している。その下には水漏れを防ぐために黄褐色の粘土を張っている。

どこから水を集めたのかについては集水孔らしい豎孔があり、井戸様の遺構から横井戸を通して水がこの池に集められたと思われ、苑池遺構の北側に石に囲まれた深い豎井戸が確認されている。しかしそれがどこからこの池に取り入れられたのかはまだ不明である。雨水などによって水が溢れた際には排水する溝状の施設が真直ぐ東側へ伸び、東側の切岸に流されたようである。

石組列1が北縁、石組列6が南縁、石組列5が東縁を形成し、石組列2が池の中に向かって東縁から伸び、石組列4が西縁から東縁へ向かって突き出し、池の中央には石組列3がありここに70×50cmほどの平らな石が^{つくばい}蹲状に配されている。この池の大きさは東西で5.5m、南北で8mで、ほぼ隅丸の長方形を呈し、その中に岬状に突き出た箇所が3箇所あって、池の景石として趣を添えていたものと考えられる。

苑池の内部や周囲からは青磁や白磁なども出土している。寺院がここにあった16世紀中葉天文年間に、寺に付随する苑池として設けられたのであろう。

苑池東側にも円柱痕を主とする小ピット群が散在するが、まだ建物を想定するまでには至っていない。おそらく苑池を眺める位置にあり、それに関連する建物があったのではないだろうか。

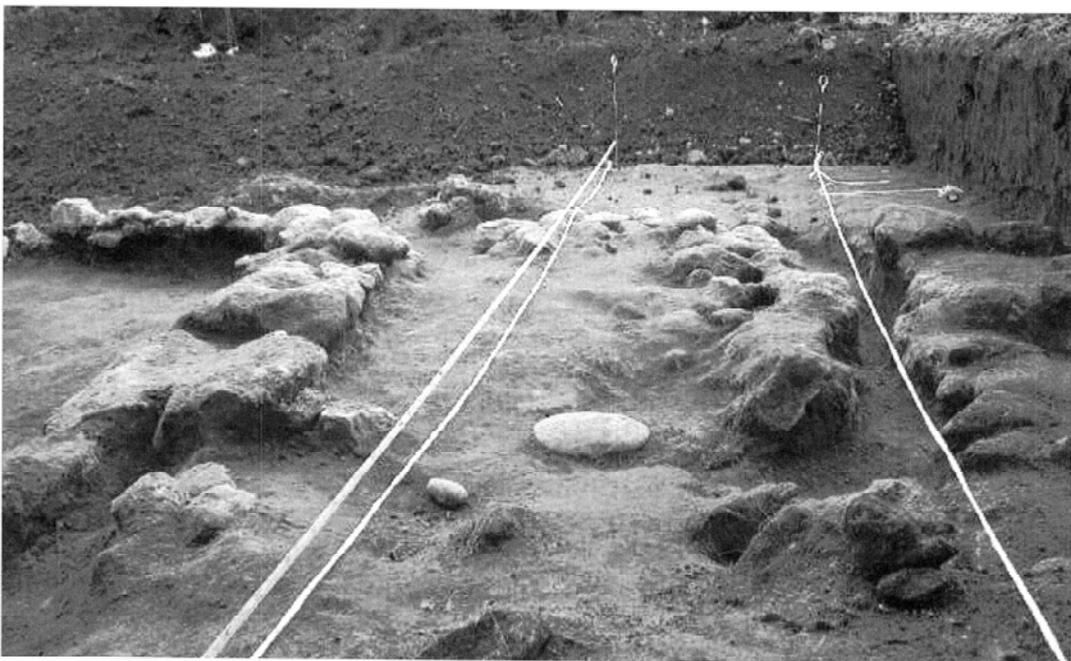
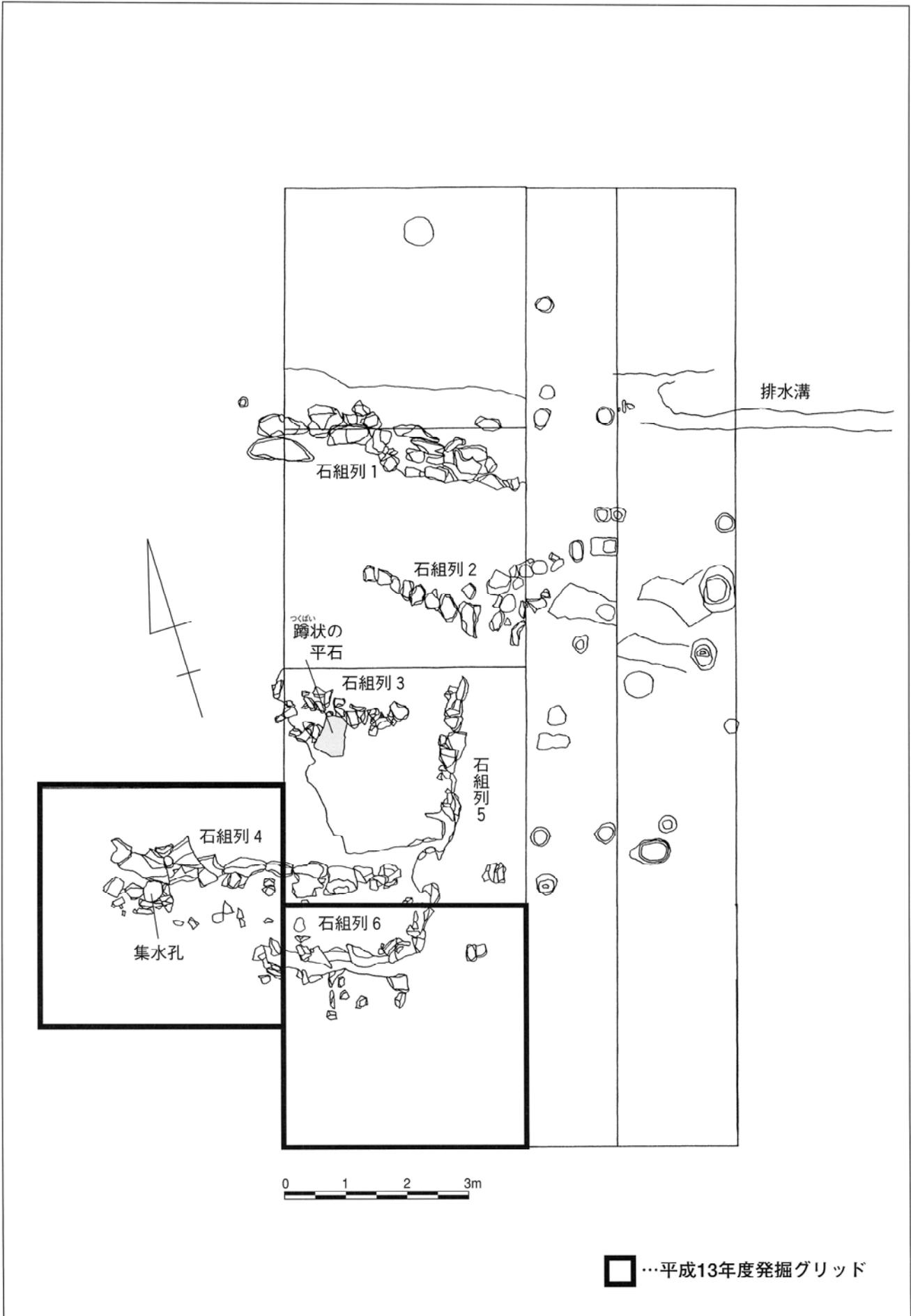


写真21 苑池遺構（石組石4・6）

第9図 楯山城寺屋敷苑池遺構平面・断面図



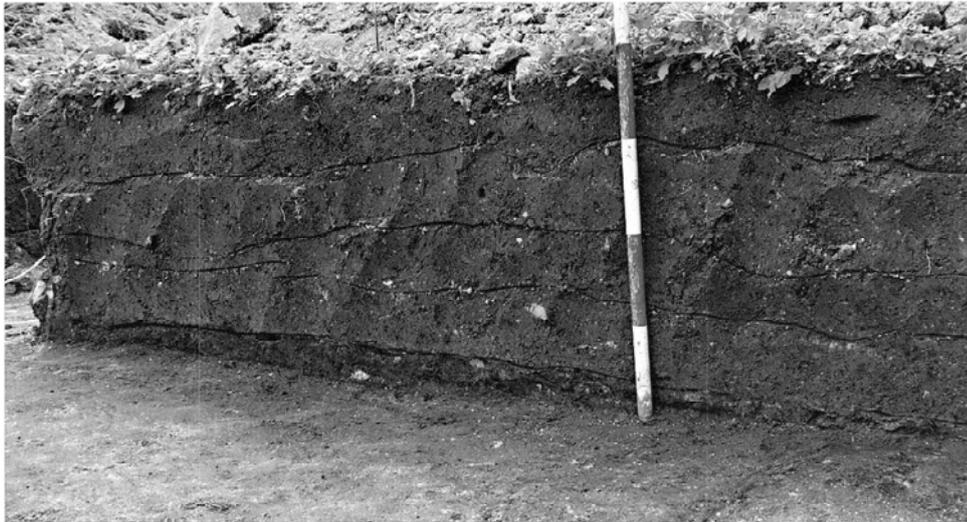


写真22 ①苑池遺構部分断面



写真22 ②苑池遺構石組列断面

第3節 出土遺物（第10図参照）

昨年度の発掘においては、しのぎ蓮弁文様の青磁や白磁片など苑池遺構にふさわしい出土遺物があった。今年度は発掘面積が小範囲であることもあって出土遺物は少量である。すなわち「かわらけ」片2、播鉢片1、染付け磁器片4、熱をうけて黒変した土器片4、陶器片3で、すべて4 cm以下の小破片であった。

2点の「かわらけ」片は、図示したが（第10図1・2）、1は酸化炎焼成で黄褐色を呈し手づくね風である。2は還元炎焼成のろくろ成形で、灰黒色を呈した須恵器系である。底部は糸切によっている。いずれも口径10cm内外、高さも3 cm程度の小型のものである。染付磁器片の中には明治以降の印判手が1片あり、いずれも後世に混入したものであろう。播鉢は茶褐色の器色で、内面卸目の痕跡があり、外面は横位のナデが認められる。（第10図4）。陶片は急須の破片らしいが、近代のものであろう。他の磁器も肥前系磁器の木の実をモチーフにしたものもあるが（第10図3）、すべて江戸時代から近代にかけてのものである。

「かわらけ」などは、この遺構が機能していた16世紀のものと見られるが、他の陶磁片は近世から近代の遺物である。

第10図 寺屋敷出土遺物実測図

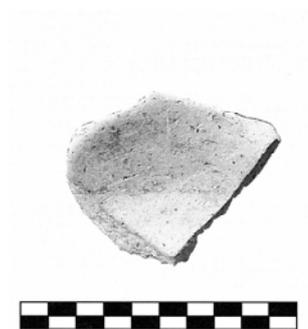
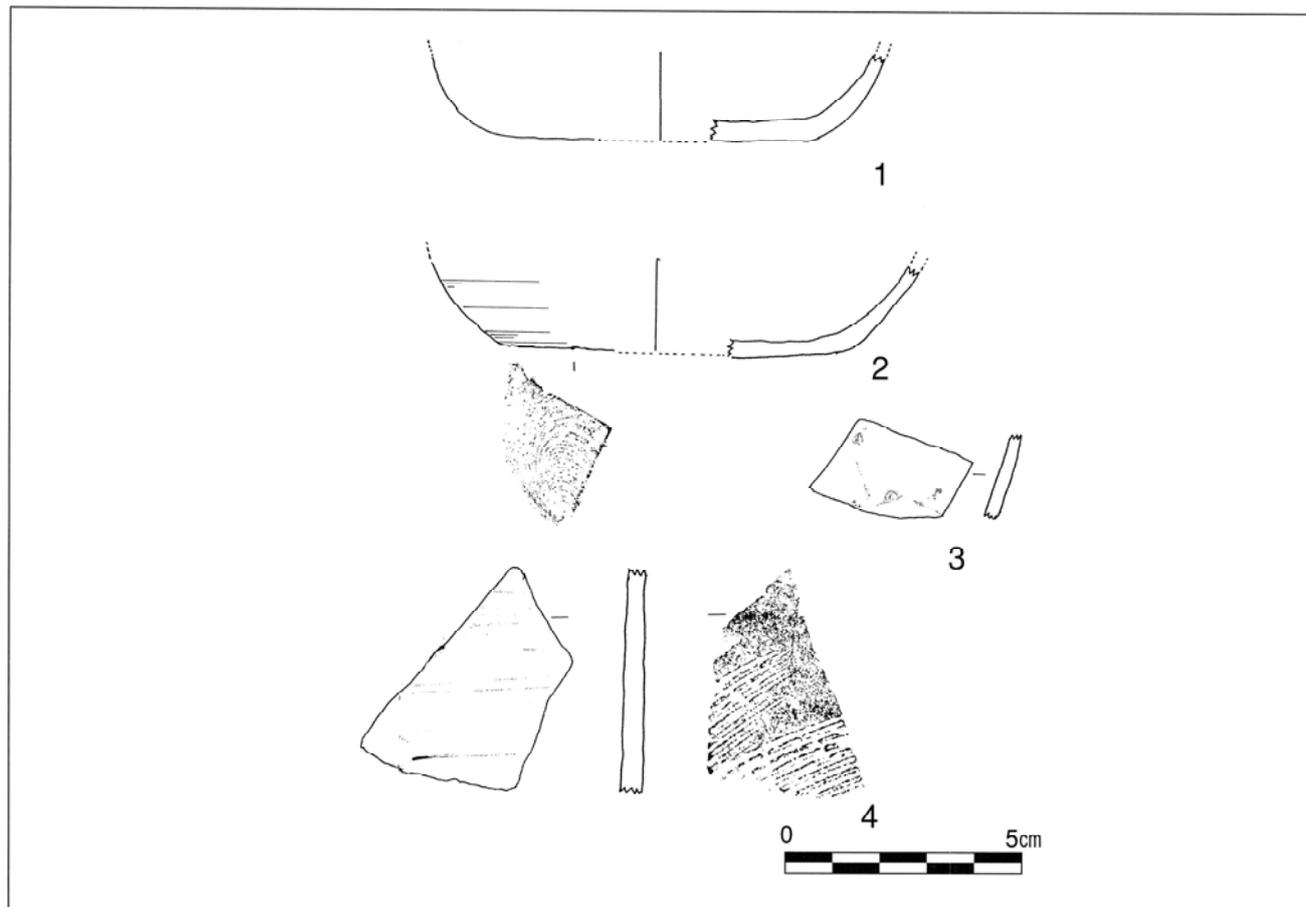


写真23 ①陶器片 1 左



①陶器片 1 右



写真23 ②陶器片 2 左



②陶器片 2 右



写真23 ③陶器片 3 左



③陶器片 3 右

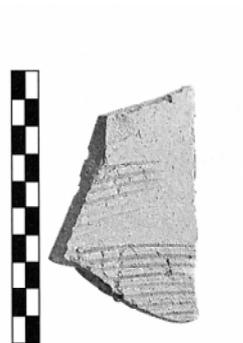
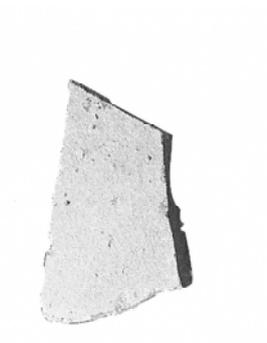


写真23 ④陶器片 4 左



④陶器片 4 右

第4節 寺屋敷の全体像

寺屋敷は楯山城の最も東に位置し、東側は桧木沢、南側は蛇沢などの深い溪谷で画され、西側の尾根上には山頂部主郭から連なる狭い曲輪群が段状にいくつものびている。

この寺屋敷の平坦地は、南北30m、東西20mの細長い菱形状の平面形を呈し、この北の一段下がったところにもこれより小さいが平坦な曲輪がみられる。

寺屋敷と呼称されるこの曲輪北側に、5間四方の寺院と思われる掘立柱の仏堂が建っていた。これを仏堂とした根拠については2000年度の調査報告書で述べた。現在の曹洞宗巨海院の前身である真言宗巨海院で、天文11年（1542）に柴橋落衣より楯山城内に移されたと古文献に伝えられている。寺屋敷で発掘された寺院遺構がそれであることはほぼまちがいない。

おそらく左沢楯山城の城主で、付近一帯を支配する領主の左沢氏によって、楯山城の鬼門にあたるこの地に祈願寺として移されたに違いない。城中や城の近くに寺社が建立される例は多い。その後、左沢城下の整備によって16世紀末頃再び移建しているが、寺の建物の一部は城郭の施設として再利用され、廃城時まで命脈を保つことは前述した。

この寺には、庫裡と思われる柱穴の一部もその南西部で発見されているし、東側にも小堂宇などがあったらしい。その規模など詳細は不明である。そして寺院と思われる遺構の15mほど南西部より小さな苑池遺構が発見された。平面形8×5.5mほどの長方形で、石組みなどによって構成される。おそらく寺院があった頃の苑池であろう。苑池にのぞむ東側にも建物跡があり、その規模や性格は不明であるが、苑池と関連がある施設と思われる。

池の中や周辺から青磁や白磁などの貿易陶磁器の小破片も出土している。おそらく寺院にともなって茶室などの風雅な空間があり、領主が客人などを招き入れる場ではなかったかと考えられる。武田氏や朝倉氏などの戦国大名はもとより、長野県中野市にある北信濃の国人衆である高梨氏の居館跡などでも庭園遺構が発掘されている。県内で戦国期の領主居館から庭園などが発掘された例はほとんどないが、昨年発掘された櫛引町丸岡城でその一部が発見された。

左沢氏などの地域領主も庭園や茶室など風雅の場を持っていたことは当然であろう。ここは左沢楯山城の奥座敷とでも言いうる場所であったに違いない。ここに至るには谷底道を辿り蛇沢を見下ろしながら、つづら折りの狭い山道を上ってくる他にはルートがない。調査団が毎日通った道である。戦国のむかしに思いを馳せながら、夏の日汗して上ったことがよみがえってくる。

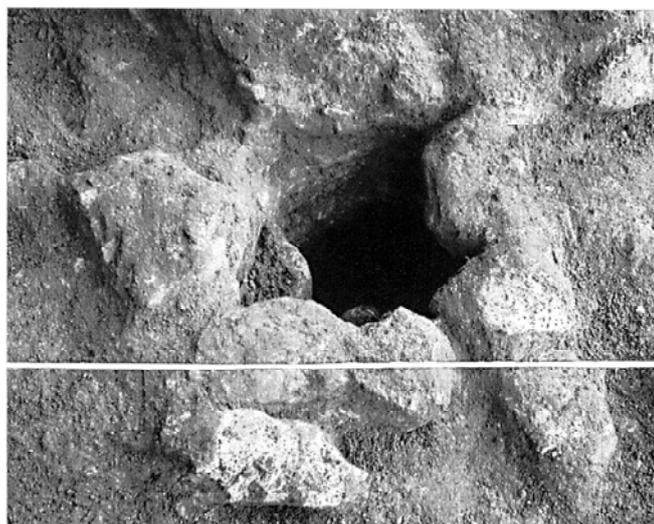
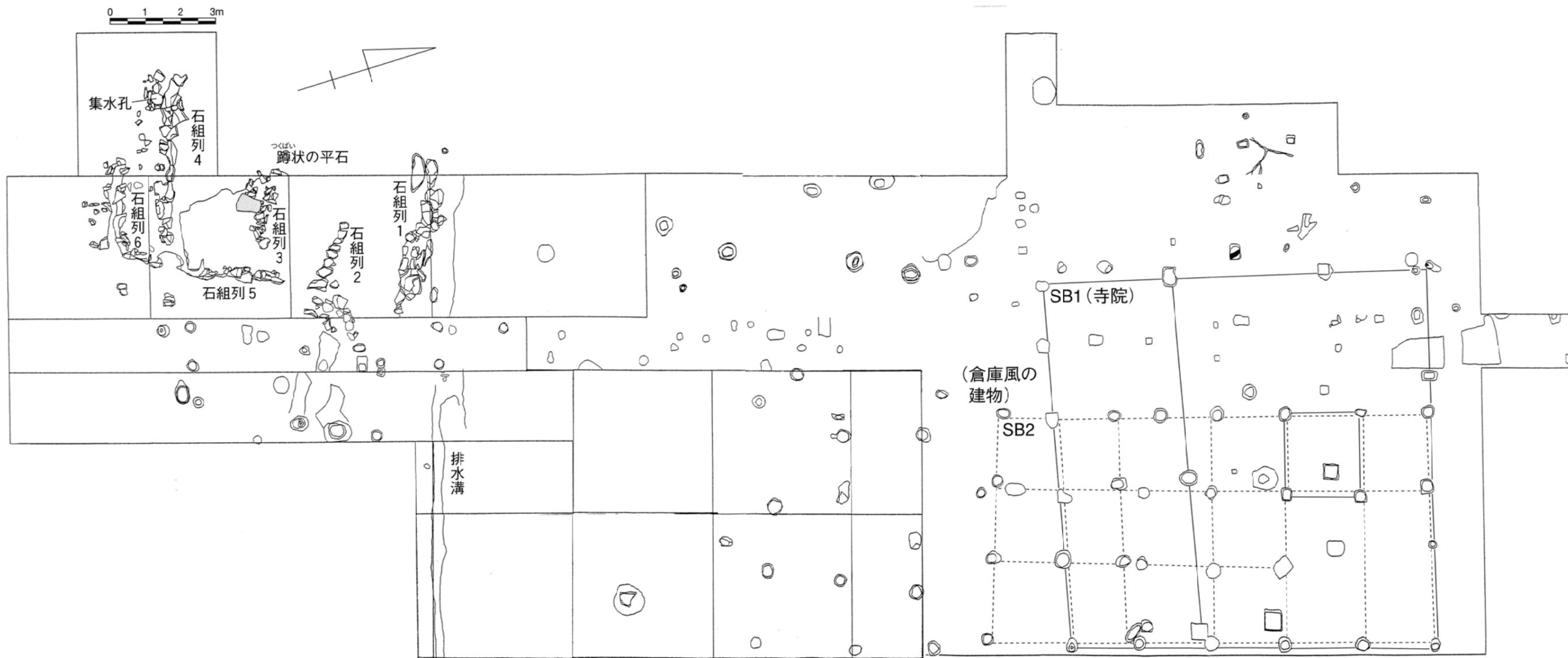


写真24 苑池遺構集水孔



第11図 楯山城寺屋敷遺構全体図

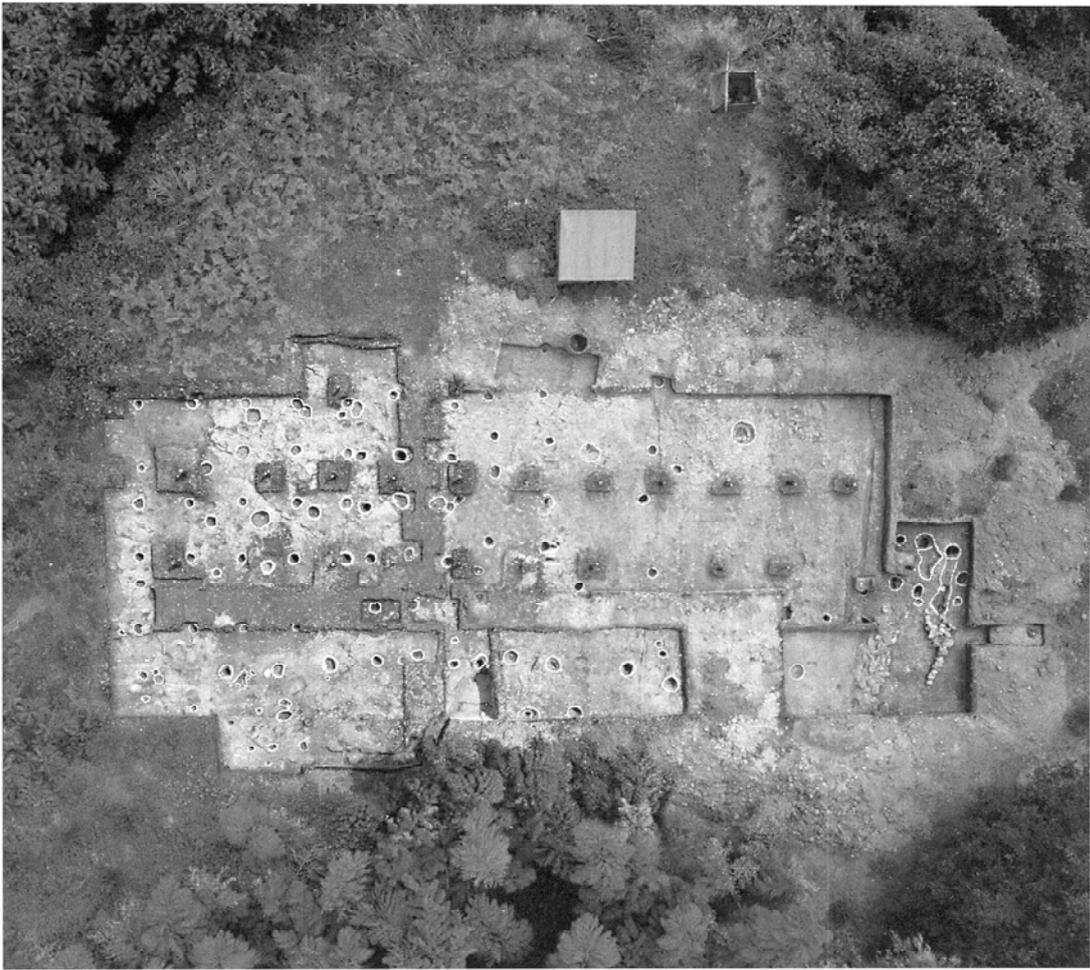


写真25 寺屋敷全体



写真26 苑池遺構 (石組列4)



写真27 苑池遺構発掘調査風景

第3章 縄張図調査

第1節 C地区（北外郭 通称：見張台）

左沢楯山城遺跡調査概要図（第2図参照）で示すC地区は、主郭と想定される八幡座を中心とする曲輪群からなる一帯（平成12年度縄張図調査）、それより尾根を隔てた東側に位置する寺屋敷と称される広大な曲輪を中心とする地域（平成11年度縄張図調査）、そして今年度調査を行った八幡座の北側に張り出した通称見張台と呼ばれる外郭により構成される。

北外郭は、八幡座より西に張り出した尾根が北に向きを変え、その尾根の延長上にある3方を急峻な断崖により独立された台地に築かれた曲輪群である。中心となる曲輪Ⅰは、東西10メートル、南北15メートル程の方形の曲輪であり、十分な広さとは言えないものの、通称からも櫓などの見張台的な構築物が建っていたことが想定できる。南辺中央に曲輪Ⅱからの登り口（ア）があるが、近年の造作とも思われ、虎口とは断定できない。曲輪Ⅰの下段には曲輪Ⅳが取り巻くように配され、さらに北東方面から東側にかけては3・4段の帯曲輪が廻っている。

本地域における西側斜面の切岸は総じて非常にしっかりしており、曲輪Ⅳと西側の曲輪Ⅴとは10メートル程を有し直接の連絡は不可能である。曲輪Ⅴとさらに2段続く腰曲輪、および曲輪Ⅵとの間の谷部にやや不整備に配された曲輪、さらに南西方向からの進入は曲輪Ⅵ周辺から曲輪Ⅱに至るのが唯一のルートであり、この進入口（イ）は重要な地点といえる。また、高低差のほとんどない尾根上の曲輪Ⅲから曲輪Ⅰとの間に、堀のように一段低い曲輪Ⅱを設けることにより、曲輪Ⅰの高さを創出する工夫がなされている。

この北外郭の性格については、八幡座と北外郭の間に広がる谷部、街道や町場との関係など、左沢楯山城全域との関わりから総合的に考察する必要があるが、西側に対して曲輪が非常に発達していることから、外部の西に位置する通称「裏山」の麓を通過する「天神越街道」や北東方向への備え・見張り場であると考えられよう。また、中心部である曲輪Ⅰ周辺は、曲輪の配置や鋭い切岸などに高い技術が感じられる一方、その縁辺部では（ウ）、（エ）のような造成途中と思われる曲輪の遺構が見られることから、構築は楯山城全体の中でも比較的新しい時期と思われる。今後、調査委員会等において更なる調査・検討を重ねていかなければならない。

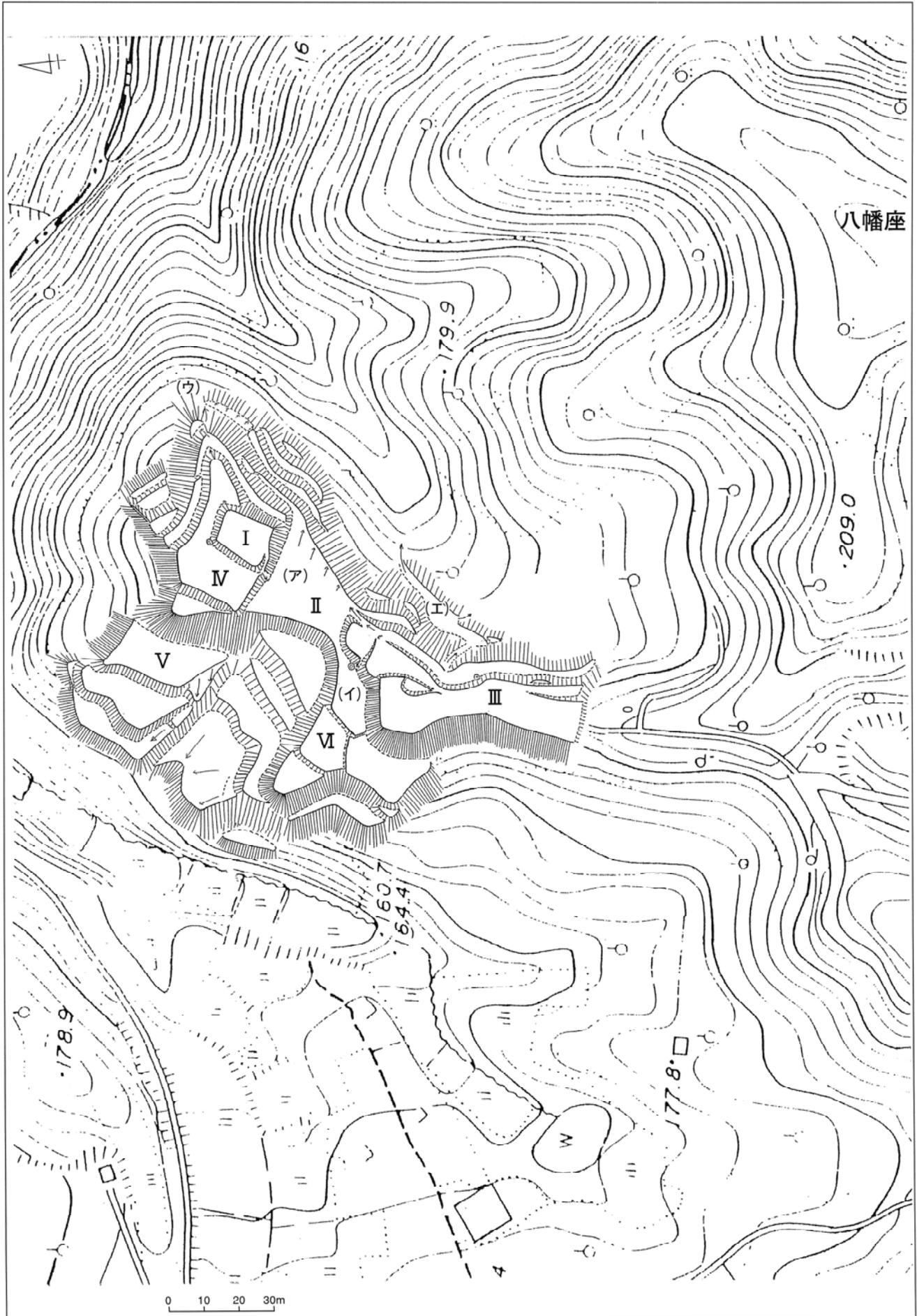
第2節 B2地区

左沢楯山城B2地区は、楯山公園から愛宕神社一帯に広がる丘陵全域を対象としており、その南麓には元屋敷（A地区）という地名が残ることから居館が存在していたと思われ、居館を防備する役割を担っていたとも想定される地区である。（第2図参照）

この度現地踏襲調査を実施したところ、平場の連関性の欠如や近年と思われる開発状況から、愛宕神社周辺についてはその全域にわたる城館の遺構を確認することはできなかった。再度調査委員会により現地調査を行い最終的な判断を仰ぐことになるが、確認できなければ楯山城域構想の再検討が必要となるであろう。

ただし、今回調査を行った範囲の中で、2つの尾根筋とこれに挟まれた谷には明確な遺構が認められた。東側の尾根には、現在の朝日少年自然の家へ通じる道路から麓に向う急斜面に、30段近くの腰曲輪

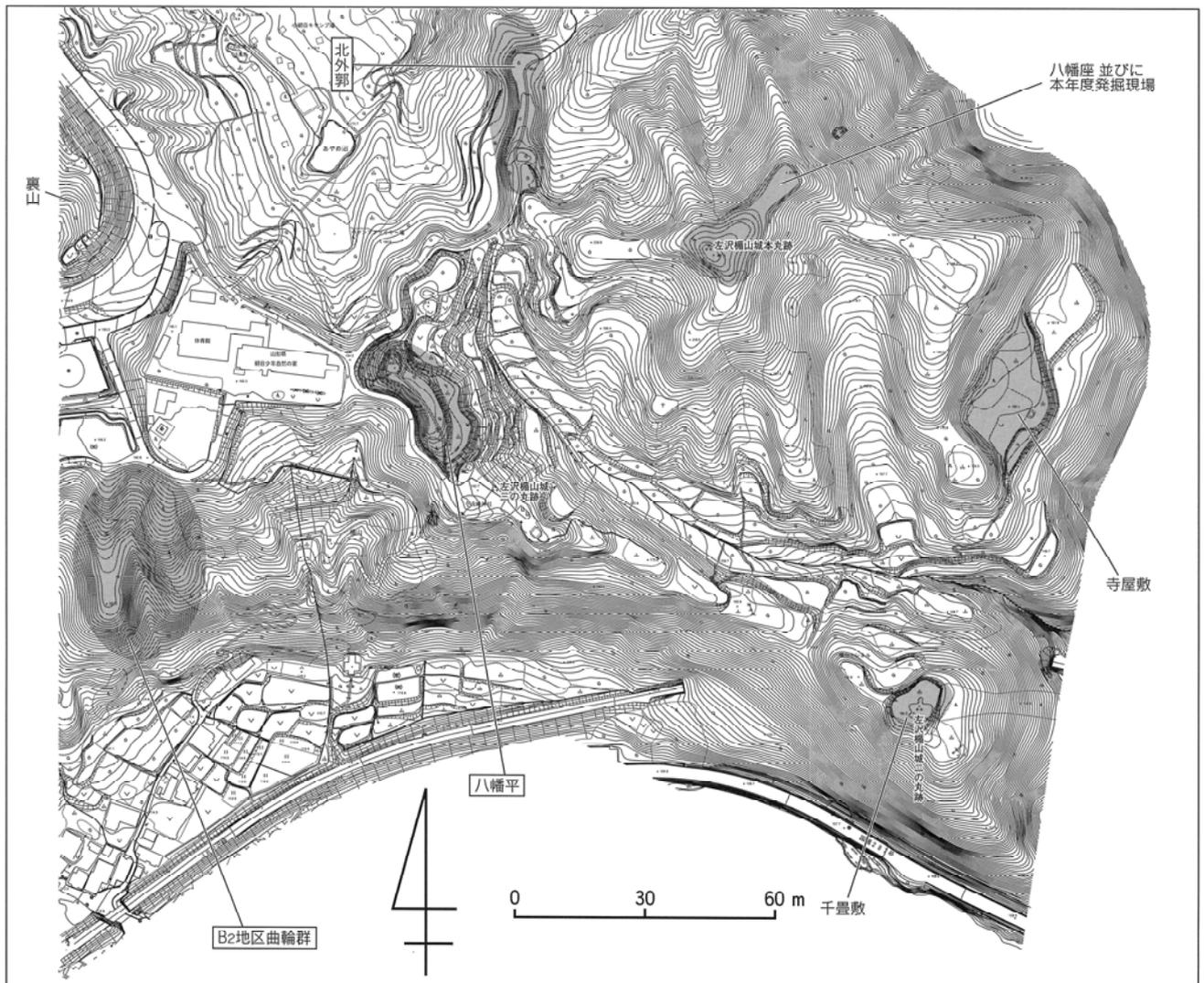
第12図 C地区（北外郭通称 見張台）縄張図



および帯曲輪が連続しており、尾根筋から西方向に曲輪が伸びているものがほとんどで、谷の曲輪には（ア）、（イ）の帯曲輪により連絡されている。逆に東側の谷に向かっては断ち切られたように閉じているのが特徴である。

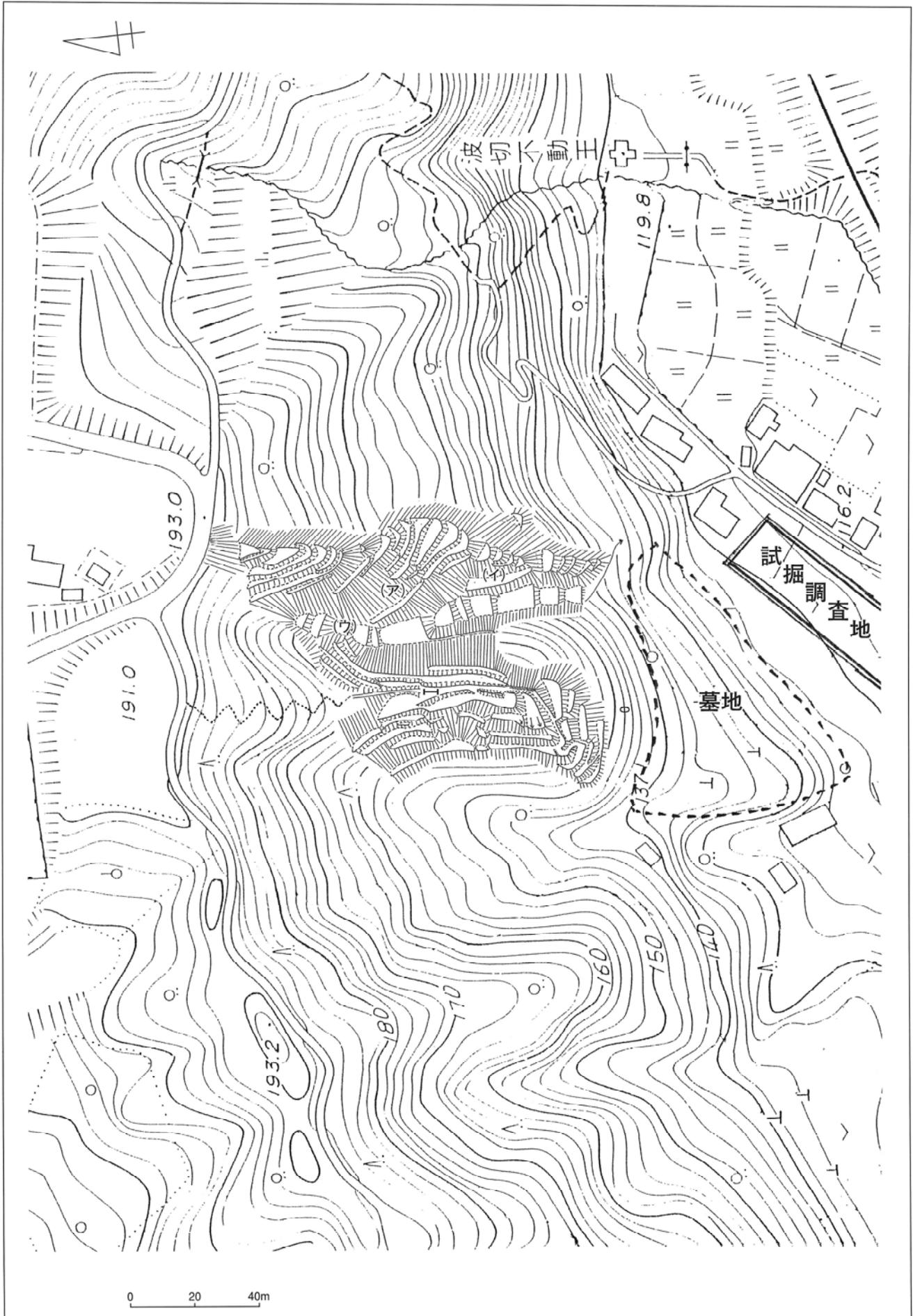
西側の尾根は張り出した曲輪Ⅰを中心としており、麓から上部駐車場に至る明瞭なルートが認められる。麓近くは墓地となっており、また藪も深かったため図に記すことは出来なかったが、道は近年まで使用されていたと思われる。曲輪Ⅰは、中央を道が通り、その両側に一段低い帯曲輪を廻してあるこの地域最大の曲輪であるが、小屋等の構築物や恒常的な兵の配備には不十分であり考えにくい。曲輪Ⅰより西側に向かっては3、4段の曲輪が配され、それより先は果樹園となっていたようで判別できかねる。南西には曲輪を利用した道と、それを意識した曲輪が連なっている。東の谷には唯一（ウ）の帯曲輪により連絡されている。

なぜこの一帯にだけ城郭と思われる遺構が存在するのか、これに関する記録や伝承は全くないが、その麓はまさに居館跡の想定場所として試掘調査を行った地点である。その際には確定づける成果は認められなかったが、仮にこの周辺に居館があったとすれば、居館の背後からその備えを見せつけ、また楯山城への登城ルートとして利用されていたとも考えられる。なお、朝日少年自然の家がある場所はこれが建てられる前までは小高い山で、その頂上から曲輪が続いていた可能性もある。さらに八幡平下を迂回する道もあったという話もあり、それらを踏まえて調査を進めていかなければならない。



第13図 参考概要図

第14図 B2地区縄張図



第4章 成果と課題

第1節 今年度調査の成果

寒河江荘の地頭寒河江大江氏の一族左沢氏が、居館の詰め城としてB1（千畳敷付近）地区に山城を築造したのが南北朝期頃とされる。室町期にはB2（朝日少年自然の家付近）地区を増築していき、戦国期にはC（八幡座周辺）地区まで拡大し、さらに慶長5年（1600）の出羽合戦頃にはD（裏山）地区を急造する。

このように左沢楯山城は、最上川の舟運と河岸、それに築場などの支配を念頭に築造された中世城郭である。また地頭領主・国人領主として戦国期まで現在の西村山郡一帯を支配した寒河江大江氏の支城でもあった。もちろん天正12年（1584）の天童合戦以降は左沢氏に代わって最上氏の支配下に属し、最上氏領国の支城の一つになる。第1章から3章にみるように、これらの見通しを裏付ける成果が毎年生まれている。以下、概括してみよう。

（1）発掘・試掘調査の成果

八幡座とその周辺の調査では、櫓とその構造、柵列、切岸などの究明ができた。1区のトレンチからは4本柱の櫓跡、周囲には柵列が廻っている姿。2区のトレンチからは、4本柱の櫓と梯子、周囲に柵列が廻る姿。3区トレンチからは、建物、柵列、切岸などが見えてくる。ここが駐屯地としてふさわしいと考えられる。柵列に関しては、平成8年（1996）に実施した西郭の発掘で確認された柵列と共通すると思われる。遺物では、弓矢の矢を研いだと考えられる半分欠けた硯や古伊万里などの破片が出土した。

一方、4年にわたる寺屋敷の調査によって、寺屋敷全体像にかなり迫ることができた。仏堂と庭園の存在から、たんなる持仏堂としてだけではなく、左沢楯山城における儀礼的空間の場として捉えることができよう。客人を迎えての茶の湯などを催して応接する場、いわば迎賓館的空間といえよう。さらに領主と家臣の儀礼の場、結集の場などが想定されよう。

（2）縄張図調査の成果

B地区のうち、B2域の西側の構造がかなり明らかになってきた。現在朝日少年自然の家がある部分は小高くなっていて、八幡平よりも標高が高かったという。歌碑のある日本一公園に通じる道を開削する写真が残っていることが、それを彷彿させる。その小高い山をぐるりと回る道があったという（現在水道給水塔がある所から朝日少年自然の家の前の駐車場に至る道と重なる）。この道の延長線上に今回とった縄張図の部分があり、その麓には実相院があったとされる箇所がある。このラインより西側には構築物がないという見通しが立てられた。この西側には、秋葉神社・愛宕神社が勧請されていて、宗教的空間として区分されていたことになるのではなかろうか。

長谷堂城（山形市）では、東側にあたる最上三十三観音霊場の一つである長谷堂観音がある部分については、長谷堂城の中に組み入れ、平時には参詣者を登らせるが、城郭の中核に登る部分に堀切を設け遮断して、参詣者が入り込めないようにしてある。兵事には参詣ルートを封じて軍事に対応できるようにしてある。この長谷堂城とは考えを異にしているようである。

なお、愛宕下から愛宕神社へ登る道の途中にかつて相撲場が造作され、現在もその跡が残っている。

C地区の西側の構造がかなり解明された事があげられる。

次にC地区の八幡座の西北に大規模な曲輪が確認された。西川町稲沢・吉川方面へ出る道を押さえることを意識して造成しているように思える。

第2節 次年度以降調査の課題

ここでは発掘・試掘調査、縄張調査等の諸課題についてふれる。

(1) 発掘・試掘調査の課題

C地区の機能をさらに解明するためにも、今回調査した八幡座の一段下の曲輪の調査が必要である。寺屋敷の上の曲輪や八幡平と呼ばれる曲輪の調査なども必要であろう。さらに、居館部分の確定とその調査が急がれる。居館部分からは遺物が多く出土すると考えられ、そこから年代比定なども確実なものとなろう。今後は縄張り図や測量図の作成と並行して調査の部分も新たに必要になってくることも想定しておかねばならないであろう。

(2) 縄張図調査の課題

まずB地区愛宕神社・秋葉神社がある周辺の再確認をし、左沢楯山城内に含めるか否かの確定が必要になってきた。次にC地区未調査部分の調査と、C地区全体の構造を考察することも重要であろう。続いてD地区の調査も行い、左沢楯山城全体の縄張り図の完成を目指すこと。さらに朝日少年自然の家の造成・建築によって完全に削平されてしまっているB2地区主要部の復元を縄張図上において試みる作業も、B地区全体を捉える上でも必要なことと考える。これらのことが課題として残されている。

最後に、発掘・試掘、縄張り図などの調査のみならず、航空写真や平板測量による地形図の作成、古絵図・文献・史料や他の地域の山城を含む中世城館の関連史料などの史料収集も大切である。さらに町民の方々の深い理解と支援を土台にした、町民や研究者等による研究討論・講演等によって、左沢楯山城の特色が明瞭となり、さらにより一層この調査自体が進展していくものであろう。



写真28 現地説明会風景(左沢小5・6年生も参加)

報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょういせき
書名	左沢楯山城遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大江町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第5集
著者名	川崎 利夫、伊藤 清郎、大場 雅之、日下部 美紀
編集機関	大江町教育委員会
所在地	〒990-1163 山形県西村山郡大江町字本郷丁373-1 Ⅸ0237-62-3666
発行年月日	2002年3月31日

所収遺跡名 <small>しよしゅうしゅういせきめい</small>	所在地 <small>しよざいち</small>	コード		北緯	東経	調査 期 間	調査 面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
あてらざわたてやまじょう 左沢楯山城	やまがたけんにしむらやまぐん 山形県西村山郡	324	324	38度	140度	2001.8.30	650㎡	学術調査
はちまんざ 八幡座			—	23分	13分			
てらやしき 寺屋敷	おおえまち おおあざあてらざわ たてやま 大江町大字左沢楯山	324	324	38度	140度	2001.10.3	150㎡	
		324	—	23分	13分			
			001	05秒	00秒			
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城館跡 寺院跡	16～17世紀	櫓跡 掘立柱建物跡 苑池遺構		青磁片 砥石 染付磁器片 須恵器片		左沢楯山城山頂部八幡座より2基の櫓及び曲輪の縁辺をめぐる16世紀の柵列・建物の遺構が発見された。 16世紀前半にこの地にあった巨海院跡にともなう石組みの苑池遺構(流水施設)が発見された。		

大江町埋蔵文化財調査報告書 第5集

山形県西村山郡大江町
左沢楯山城遺跡調査報告書

発行日 平成14年（2002年）3月

編集 大江町教育委員会
発行 山形県西村山郡大江町大字左沢882の1

印刷 株式会社 若月印刷
山形県西村山郡大江町大字左沢105